

# 『観心略要集』の研究

末木 文美士

目次

序

I 校異

II 注解

III 研究

一、伝来と諸本

二、撰者

三、引用書

四、思想

付、引用書索引

## 序

『観心略要集』一卷は、『往生要集』と並んで、恵心僧都源信（九四二—一〇一七）の浄土教方面の主著とされる。後にも触れるように、本書が源信のものであるかどうかという点にはなお疑問が残るとしても、『要集』と並んで日本の天台浄土教思想上重要な著作であることは間違いない。筆者は昭和五十四、五十五年度に財団法人聖徳太子奉讃会の研究生として本書の研究に従事し、その成果は昭和五十六年四月に報告書として同会に提出した。しかし、それを活字にする機会がないまま今日に至ったが、この度、それをもとに稿を改め、ここに発表することとした。

本稿は三部よりなり、Ⅰでは寛文刊本をもとに諸本の校異を示した。但し、寛文本は一応『恵心僧都全集』（恵全）第一巻に翻刻されているので、ここでは本文を再掲出することを避け、校注のみ掲げる。Ⅱでは、本書中の引用文の出典を中心に注を付した。本書は引用が明示されているものばかりでなく、典拠のある語句が多く本文中に埋め込まれ、むしろそれらを綴り合せて一書を成していると言っても過言でない。従って、その典拠の解明は本書理解の鍵となるものである。これらの典拠は既に江戸時代から調査されてきているが、この度、先学の指摘を参照に、新たに調べ直した。また、普通の漢文としては理解しにくい特別の語法などにも注を付した。Ⅲでは、Ⅰ、Ⅱの基礎作業にもとづいて、本書の諸問題について検討を加えた。即ち、Ⅰでは本書の古来の伝承と現存の諸本について考察し、Ⅱでは本書の撰者について従来の諸説を紹介しつつ検討する。また、ⅢではⅡの調査をもとに本書の引用書の特徴を明らかにし、Ⅳでは本書の内容を概観する。本来、本書をより広い思想史の場に引出し、その思想的意味を明らかにす

ることこそ目的であるが、本稿ではむしろその為の基礎研究に限定し、Ⅲでも、そこまで説き及ぼすことをしなかつた。

## I 校 異

### 凡 例

- 一、底本は寛文十一年刊本（東京大学印度哲学研究室所蔵）であるが、便宜上、同刊本の翻刻である『恵心僧都全集』（恵全）第一巻所収本にもとづき、校異を示す。但し、以下に示すように、恵全本には誤字が多く、あらかじめ改めた上で用いる。また、恵全本も上欄に校異を掲げているが、不完全であり、今回は全く新たに校勘を試みた。
- 二、校本は以下の通りで、上欄の符号を用いる。

甲……寛永三年刊本（大谷大学図書館蔵）

乙……無刊記刊本（大正大学図書館蔵）

注……寛文本卷末注記

冠・傍……同冠注・傍注

これら諸本については、Ⅲ・一を参照。

- 三、返点・送り仮名は校勘の対象としない。また、原則として正字体によるが、明白な異体字・略字は一々注記しない。Ⅱ、Ⅲ章では原則として新字体を用いる。

四、校異の記載法は以下の通り。

1 頁数は恵全本の『略要集』のみに付された頁数である。即ち、本書は恵全一の二七三〜三三八頁に収められているが、全体の通し頁と別に、『略要集』のみ一〜六六頁の頁数がふられている。その後者を示す。これは、Ⅱ、Ⅲ章も同様。

2 数字は行数。<sup>3</sup>模―甲乙「摸」<sup>4</sup>とあるのは、三行目の「模」が甲・乙本では「摸」となっていることを表わす。同じ行中に同じ文字が二回以上現れる場合は、上・中・下等と注記する。例えば、<sup>1</sup>界(上)<sup>6</sup>は一行目に出る「界」のうち、上の方を指す。

五、恵全本は底本の寛文本と較べてみるに、以下の箇所を訂正する必要がある。本稿はこれらの箇所を改めた上で用いる。

- 二頁 10 性↑姓 11 之↓賤
- 三頁 6 己↓巳
- 七頁 10 萬↓ナシ
- 八頁 7 子↓士
- 一一頁 1 綱↓網 6 跌↓跣
- 一六頁 1 曳↓曳 8 慚↓漸
- 二〇頁 1 縛↓縛 性↓徳 4 縛↓縛 9 薰↓熏 11 薰↓熏
- 二四頁 3 醒↓醒

- 二七頁 9 叟↓臾
- 二九頁 5 縛↓縛
- 三一頁 1 牛↓午 2 縛↓縛 12 樂↓藥
- 三二頁 6 (割注) 俱↓但 6 禍↓福
- 三四頁 5 縛↓縛
- 三五頁 10 眼↓眠
- 三七頁 1 瞑↓瞑
- 三九頁 11 往↓住
- 四一頁 12 與↓興
- 四二頁 3 晝↓晝
- 四四頁 11 境↓鏡
- 四六頁 5 (割注左) 知↓善知
- 四七頁 5 巳↓巳 9 巳↓己
- 四九頁 7 訶↓摩訶
- 五五頁 7 三↓二
- 五七頁 10 如↓加
- 五九頁 11 宣↓宜

六三頁 9文↓又

六四頁 9貪↓貧

六五頁 8次に「觀心略要集終」の一行あり 10生死↓死生 11↓12改行なし

六六頁 2寶↓寬 4↓6三行削除

〔一頁〕

1集—乙「集序」 2源信述—甲乙注ナシ 述—注(有本)「撰」 3台—注「台之」 模—甲乙「摸」 4曰—注

「云」 淪—注「輪」 云云—甲乙注ナシ 5心—冠「由心」 迄—注冠「迨」 7慧—甲乙「惠」 8界—甲乙

「世界」 9釋—甲乙「明」 11問答料簡釋—甲「釋問答料簡」

〔二頁〕

1第一—甲乙この前に「觀心略要集 天台沙門源信撰」の一行あり 界(上)—甲乙「世界」 者(下)—甲ナシ 2基

—甲乙「基也」 曰—注「云」 3業—甲「業也」 世間—甲「間世」 5念—甲乙「念乎」 且除細念生滅—甲

乙割注 8虺—甲「虺」 乙「虺」 9「幢」—甲乙「幢」 10貴—注「貴之」 11賤—注「賤之」 12富—甲

乙「福」

〔三頁〕

2要—甲乙「要也」 之(下)—甲乙ナシ 3慮懷—甲乙注冠「兼濟」 從—甲乙注冠「徒」 愛—甲乙「愛之」

而—甲乙ナシ 7熱(上・下)—甲「熱」 亦—甲乙ナシ 之(下)—注ナシ 8漏—注「漏之」 9明—注「明之」

而(上)―甲乙ナシ 10 中―注「中之」 11 欣―甲「傾」

〔四頁〕

7 途―注「惡」 栴―甲乙「旃」 攀―甲乙「擧」 10 離―注「離之」 11 之(上)―甲乙ナシ 12 之―甲乙ナシ

〔五頁〕

3 往―甲ナシ 4 善―甲乙「善之」 5 陀―甲乙注「陀之」 8 曰―注「云」 我國―甲注冠ナシ 當―甲乙注冠

「常」 我(下)―甲之注冠「我名」

〔六頁〕

6 鏡(上)―甲乙「鏡也」 10 德―甲「得」 也―注傍ナシ 故―注傍ナシ

〔七頁〕

1 也―甲乙ナシ 須―甲乙「但須」 4 諦(下)―甲「諦空諦」乙「諦則是」 5 卽(上)―甲乙「則」 是―甲ナシ

6 華―甲乙「花」 經―注ナシ 曰―注「云」 8 萬―甲乙「萬法」 於―甲乙注ナシ 一―甲乙注「一念」 10

又如―甲乙注傍ナシ 11 復―甲乙傍ナシ 千―甲乙「千乎」 12 飛―甲ナシ

〔八頁〕

1 之(上)―甲乙注ナシ 本自―甲乙「自本」 之(下)―甲乙ナシ 3 在―甲「有」 6 經―甲乙注冠「多」 頃―

甲乙「頃也」 7 士―甲乙「子」 12 功―甲乙ナシ 之―注ナシ

〔九頁〕

5 庸―注冠「庸」 7 句―甲乙「苟」 錦―甲乙「綿」 11 「華」―甲乙「花」 12 之(上)―甲ナシ 飛―甲ナシ

〔一〇頁〕

2 惑―注冠「迷」 3 之(下)―甲乙ナシ 7 在―甲乙「有」 12 渠―甲乙「渠」

〔一一頁〕

1 條―甲乙注「彼」 2 在佛―注「佛在」 3 遇―甲「過」 之(中)―甲乙ナシ 4 曰―注「云」 一妙―甲乙  
「一妙」 5 金―甲乙「金之」 6 千―甲乙「千輻」 自―甲乙「自先」 8 之―注ナシ 右旋―注ナシ 旋―  
甲乙ナシ 於―甲乙ナシ 9 兜―甲乙「都」 面―乙ナシ 現無量光―甲「無量光現」 10 但―甲乙「俱」 華  
(上)―甲乙「花」 12 中―乙「光中」 一一相好―甲ナシ 相(下)―注ナシ

〔一二頁〕

1 其色―注冠ナシ・注(一本)冠「其光」 微―甲「微」 百(上)―注「萬」 2 各各―甲乙注「各」 3 阿―傍  
ナシ 陀―注ナシ 彼佛―甲乙注傍ナシ 5 夜闍―乙「闍夜」 攝―甲乙「接」 6 攝―甲乙「接」 曰―注「云」  
11 無(上)―甲乙「無量無」

〔一三頁〕

1 蔽―甲乙「弊」 2 見(下)―甲乙「見之」 5 曰―注「云」 者―甲乙ナシ 6 現―注「見」 6 7 (割注)  
觀佛…云云―甲乙本文扱い(割注右) 佛―甲乙ナシ・注冠「佛三昧」(同左) 救―甲乙注「拔」 7 (同右) 然―  
乙注「燃」 10 見諸相好―甲「諸相好見」 故―注「之故」 列―甲乙「烈」 11 報(上・下)―甲乙注「法」 在  
―甲乙「有」

〔一四頁〕



2 從—甲「徒」 3 是—甲ナシ 皆—甲乙注「皆是」 4 空—甲乙「空寂」 藏—甲乙「藏理」 6 高—甲「高有」・注冠「高在」 之—甲乙ナシ 7 辨—甲乙「辯」 土—注「土之」 10 二—甲乙「二之」 11 壽—甲乙「壽命」

〔一五頁〕

1 算—甲乙「算」 4 底—注冠「庭」 5 愛—甲注「憂」 煥—甲「燭」 6 木—甲乙注「水」 孤—甲乙「狐」 常—甲ナシ 8 趣—甲乙「趣之」 10 畢—注「了」 曰—注「云」 11 「盡」—甲乙「盡期」 曰—注「云」

〔一六頁〕

1 空—甲乙注「虛空」 5 (割注左) 意—甲乙注ナシ 5 心—甲乙「心身」 6 熏—甲乙「薰」 曰—注「云」 7 理—冠「理—理」 11 性—注冠「界」

〔一七頁〕

1 是以…云云(十九字)—注ナシ 2 隔—甲乙「攝」 封—甲「對」・乙「隔」 3 等—甲ナシ 4 也—注ナシ 只—甲乙ナシ 5 曰—注「云」 8 之—注ナシ 是—注「此」 11 有疑—甲「疑有」 能—注ナシ 12 於—甲乙ナシ

〔一八頁〕

2 陀—注「陀之」 觀—甲注「諦」 曰—注「云」 6 華—甲乙「花」 8 妙—甲ナシ 9 之—甲ナシ 爲得道—甲乙「得道爲」 12 現—甲乙「觀」

〔一九頁〕

2 是—甲乙「此」 5 之理—甲乙注「理之」 始非—甲乙「非始」 6 曰—注「云」 9 曰(上・下)—注「云」

心―甲注「身」 身―注「心」 12 曰―注「云」 行―甲乙「行之」

〔二〇頁〕

5 熏―甲乙「薰」 7 性―乙注「清」 8 煙―甲「燻」 9 熏―甲乙「薰」 故―甲乙「故也」 11 熏―甲乙「薰」

〔二一頁〕

2 既―甲乙注「卽」 是―甲乙「是既」 3 界―乙「果」 6 婉―注冠「姦」・注「孩」 既―注「已」 問―注  
ナシ 8 要―甲乙「惡」 過性惡―甲「性惡過」 形於―甲「於形」 9 道―乙「情」 态度：利生(十九字)―乙  
「垂應於十方飽施隨類之利生道态度難化之有情」

〔二二頁〕

1 之―注ナシ 4 曰―注「云」 6 惱―冠「惱菩提」 8 變―甲「辨」 12 聖―注「性」

〔二三頁〕

1 因果等―注ナシ 心(下)―甲注ナシ 6 水(上)―甲乙「水之」 7 之(上)―甲ナシ 8 曰―注「云」 9 想―甲  
乙注「想之」 淨―注「清」 10 水―甲乙「水之」 11 德―甲「得」 感―注冠「應」 攝―甲乙「接」

〔二四頁〕

1 煩―注冠「起煩」 2 止觀―甲「弘決」 3 寤―甲「性」・乙「悟」 6 起諸：善等(八字)―甲乙注ナシ 8 之  
―甲ナシ 9 于―甲乙ナシ 10 光―注冠「炎」 11 白―甲乙「自」 之―甲ナシ 裏―注「中」 生―甲乙注「上」  
12 命―注「欲」 忘―冠「荒」 喜―注傍「善」 歲―甲乙注「歲之」

〔二五頁〕

1 曰―注「云」 六―乙「六分」 2 云云―甲乙ナシ 3 亦―甲乙「又」 4 曰―注「云」 或―注「或以」 5 生剝牛―乙「剝生牛」 6 曰―注「云」 踏踐―甲乙注「陷賤」 竭―甲乙注「盡」 7 逮―甲乙注「還」 髮―注「鬢」 8 潛―甲乙注「潛」 9 易―注「安」 10 不(下)―甲ナシ 12 父母―甲乙「母父」

〔二六頁〕

2 又惜…度或(十四字)―甲乙注ナシ 6 復―甲乙「複」 8 唯非―注「非唯」 9 欲―甲乙「終」

〔二七頁〕

1 輔―甲「補」 2 象―甲「爲」 無―甲乙「無皆」 3 曰―注「云」 財―甲乙「寶」 6 尺―甲「釋」 乙「澤」 9 曰―注「云」 10 留而―注冠ナシ

〔二八頁〕

1 於―甲乙注ナシ 2 惡―注「根」 3 辨―甲「變」 黏―甲乙「黏」 4 入―甲乙注「入之」 5 終―甲乙注ナシ 6 墓―甲乙「墓」・注「墓之」 魔―注「魔之」 7 捨―注「相」 殺―甲乙「殺生」 盜―甲乙「盜賊」 之業―注「業之」 9 投多―乙「多投」 11 卽―甲「則」

〔二九頁〕

1 秋得―甲「得秋」 實―甲「寶」 2 帝―注「軍」 3 害―甲乙「迫」 4 或―甲ナシ 繫―甲乙「繫」 5 撻―甲乙「健」 6 慳―甲乙「以慳」 8 之身―甲乙注「身之」 9 之心―甲乙注「心之」 孔―甲乙「吼」 11 何―注ナシ

〔三〇頁〕

2 炎―甲乙「猛炎」 猛―甲乙「獄」 熾―甲乙「熾盛也」 3 卒―甲乙「率」 6 人(上・下)―甲乙「人之」

7 蠶—甲乙「蠶」 之—甲乙注ナシ 經—甲乙「經曰」 8 此—甲乙「此地」 之(下)—甲乙注ナシ 9 熱—甲乙注「熱之」 10 之—甲乙ナシ 11 樹—注「林」

〔三一頁〕

1 午—甲「牛」 2 到—甲乙「致」 3 族—甲乙「屬」 5 地—注ナシ 其—甲乙注ナシ 6 千—甲乙ナシ 7 否—注「不」 8 眠—注冠「迷」 迷—甲「迷也」 9 於—甲ナシ 身(下)—甲「起身」 癡(下)—甲「瞋癡」 乙「則癡」 10 則(上)—甲注「故」 12 明(上)—注「明之」 死—注「死之」

〔三二頁〕

1 竭—注「渴」 3 (割注)弘決：靜門—甲乙本文扱い 4 嘖—甲乙「瞋癡」 5 於—甲乙ナシ 則—甲「住」 5  
6 (割注)弘決：假名—甲乙本文扱い 6 (同左)名—甲乙「名也」 8 我—乙「邪」 推貪瞋—甲乙注ナシ  
9 眠心(上)—甲乙注「眠心也」 實—甲乙「實也」 10 所—甲乙「所見」 卽—注ナシ 12 空—甲乙「空也」 住—甲乙「主」

〔三三頁〕

2 卽—注ナシ 是性—注冠ナシ 4 須—甲乙「須以」 7 理—甲乙注ナシ 8 大小—甲乙注ナシ 9 無—甲乙「不」 三千存—甲乙「存三千」 10 雜—甲乙「離」・注「共」 11 偏(上・下)—甲「徧」 12 非—甲「悲」

〔三四頁〕

4 諦—注「諦之」 5 非—注「不」 縛—注「縛之」 藏(下)—甲乙「藏理」 8 蛇—甲乙「蛇等」 謂—甲乙「謂之」 9 瞬—甲乙「瞬」 12 也—注ナシ 12 三五頁1 (割注)一心：惟同—甲乙本文扱い 12 (同右)具—

甲乙「具亦是」

〔三五頁〕

1 (割注右) 密—注ナシ (同左) 說—注「觀」 台—甲乙「台一心」 二—注冠「旨」 惟—甲乙「是惟」 2 夫—注「夫之」 3 心—甲乙「心於」 4 末—甲乙「末」 5~7 (割注) 成佛…意也—甲乙本文扱い 6 (割注右) 掘—甲乙「掘」 7 (同右) 衆—甲「草」・乙ナシ 8 珠—甲乙「珠也」 之—甲乙ナシ 9 諸—甲乙「緒」 注「緒之」 之—甲乙注ナシ 12 典—甲乙「典尙」

〔三六頁〕

2 故—甲ナシ 之—注ナシ 8 眠—甲「夢」 10 爾—甲乙「爾也」 12 從他生—甲「生從他」

〔三七頁〕

1 是—注「此」 3 也—注ナシ 於(上)甲乙ナシ 4 乾闥—甲乙「乾達婆」・注「捷達」 7 言(下)—甲乙「適言」 9 在—注「有」 曰—注「云」 10 役—甲乙「役」 故—甲乙ナシ 12 死—注「死之」 曰—注「云」

〔三八頁〕

4 曰—注「云」 6 曰—注「云」 慧—甲「惠」 7 聚—注「集」 8 曰—注「云」 10 經—注ナシ 曰—注「云」 慧—甲「惠」 11 罪—甲乙ナシ 12 識—甲乙ナシ 也—注ナシ

〔三九頁〕

1 相—甲乙「性」 3 佛—甲乙「法」 4 眞—甲乙「心」 5 云云—甲乙「矣」 6 曰—注「云」 7 云云—甲乙ナシ 前後…三昧(割注)—甲乙本文扱い 8 曰—注「云」 10 云云—甲乙「矣」 11 曰—甲乙注「云」 12 妙—甲乙「妙之」

〔四〇頁〕

1 之―注ナシ 3 之―注ナシ 7 日―注「云」 9 深―甲「除」 10 環―甲乙「廻」 11 還以―甲「以還」 蟹―甲「蟹」・乙「蟹」 一―乙「云」 12 相心―甲「想」 換―甲「擲」 翻更―甲「更翻」

〔四一頁〕

1 然―甲乙「爾」 2 邊―注「數」 雖―甲乙「雖知」 誓(下)―甲乙注「誓願」 3 誓―甲乙注「誓願」 之(下)―甲乙ナシ 6 不―甲乙注ナシ 10 眞正―甲「正眞」 心―甲乙注ナシ 12 妄―注「妄謂」

〔四二頁〕

1 量―甲乙「盡」 成―甲乙「成也」 3 續―甲「續」 能成―甲ナシ・注「成」 4 非不修―甲ナシ 5 證得―甲乙「得證」 見愛―甲乙注「有見」 6 慧―甲「惠」 7 慧―甲「惠」 8 但―甲乙「俱」 12 出―甲「不出」 沖―甲「仲」・乙「中」

〔四三頁〕

1 緣―甲乙「緣於」 2 念―甲乙「念於」 7 爾―甲乙注「爾亦」 8 涅槃―甲乙注「煩惱」 濫―甲乙「亂」 9 則―甲乙注ナシ 止(下)―甲乙ナシ

〔四四頁〕

3 熏―甲「薰」 莫―乙「轉自性莫」 4 體自性―乙ナシ 業―甲乙「業之」 熏―甲「薰」 5 被―甲「彼」 7 鏡―注「鏡之」 8 拂―注「掃」 9 明―注「明得明」 11 具―甲乙「具足」

〔四五頁〕

1 曰―注「云」 2 〳3 具如：知之(割注)―甲乙本文扱い 2 (割注左) 至―甲乙注「向」 5 影―甲乙注「顯」  
中心我―乙「我心中」 7 〳8 (割注) 三寶：體耳―甲乙本文扱い 7 (割注左) 性(上)―甲ナシ

〔四六頁〕

2 意―甲乙「心」 4 四緣：識耳(割注)―甲乙本文扱い 4 (割注右) 五緣者―甲乙ナシ 5 (割注左) 者者―甲  
乙「者」 6 又―甲乙ナシ 7 悲―甲乙「悲也」 之(下)―甲乙ナシ 8 慧―甲「惠」 10 數―甲乙「數同」 停  
―甲乙「隔」 11 封―甲乙「對」 者―甲乙「著」

〔四七頁〕

1 諦―甲「對」 到―甲乙「致」 2 對―甲「諦」 也―注ナシ 3 而―甲乙ナシ 除(下)―甲乙注「除其」 4  
種類：併皆(二〇字)―乙「種類：對凡」(七字)と「厥萬：併皆」(一三字)が入れ換る 8 爲―甲乙「若爲」 9  
邊―注「敷」 10 於―甲「於捨」 度―甲ナシ 12 謂―甲乙ナシ

〔四八頁〕

2 故如―甲乙注ナシ 4 心―甲ナシ 答―甲乙「答云」 5 曰―注「云」 7 曰―注「云」 9 穀―甲乙「卵」  
云云―甲乙「矣」 10 云云―甲乙「矣」 曰―注「云」 利―甲乙注「梨」 羅―注ナシ 11 婆―甲乙「波」 12  
復―甲乙ナシ

〔四九頁〕

2 心―甲乙注「心時」 3 云云―甲乙「矣」 4 菩―甲乙注「發善」 普―甲乙注ナシ 5 功―注ナシ 7 能傷―  
甲「傷」 煙不能熏―甲乙「煙薰不能害」・注「毒不能害」 8 是―甲乙注「此」 10 見―甲乙注「觀」 熏―

甲乙「薰」 所—注ナシ 12切—甲乙「切痛」

〔五〇頁〕

1 樹王—注「王樹」 4 色—甲乙注「也」 5 發—甲「發菩提」 6 畫—甲「盡」・乙「念」 8 任—甲注「住」  
12 自—甲「目」

〔五一頁〕

1 中—注「中之」 蓬—甲「逢」 4 日—注「云」 10 問答料簡釋疑—甲「釋問答料簡疑」

〔五二頁〕

5 千—注「于」 8 嬌—甲乙「盛」 12 之(上・下)—甲乙ナシ 止—乙「思止」

〔五三頁〕

1 論—甲乙ナシ 7 薄—冠「博」 在—甲乙注「有」 11 力—甲注「力努力」・乙「努」 怠—甲乙「忘」 12 反  
—乙「返」 之—注ナシ

〔五四頁〕

2 附—甲乙「府」 11 恨—甲「根」 以無始—乙「無始以」 逐—甲乙「遂」

〔五五頁〕

1 不(上)—甲乙注ナシ 全—甲乙注「令」 實—甲乙注「生」 猶—甲乙注ナシ 5 慧—甲「惠」 7 二—甲乙  
「三」 況—甲乙注ナシ 8 藪—甲「數」・乙「藪」 9 狹—甲乙「校」 10 忘—甲「已」

〔五六頁〕



1 没—甲乙注「投」 翻—甲乙注ナシ 4 之曉—注ナシ 7 滅—甲「穢」 反—甲乙「變」 8 無—甲乙注「衆」  
9 而—甲乙注ナシ 之—甲乙注ナシ 耶—甲乙注「哉」

〔五七頁〕

8 定—乙「定緣」 種—甲乙注「習」 9 必—乙ナシ 10 善—乙「若」 溺—甲乙「弱」 11 得往生不—甲「不往生得」・乙「得不往生」

〔五八頁〕

1 大—甲乙「太」 3 冥—甲注「暗」 4 諸—甲乙注ナシ 熏—甲乙「薰」 5 故—甲乙ナシ 願行—甲乙注「行願」 此—注ナシ 念—乙「念名」 包—甲乙「飽」 6 廢—乙「背」 8 而—乙ナシ 10 何—甲「云何」

〔五九頁〕

3 不(下)—注ナシ 6 益—甲乙注「蓋」 8 麒麟—甲乙「麒麟」・注「麒麟」 10 聲—乙「聖」 11 慧—甲「惠」  
諍—注「爭」 12 者—甲乙注ナシ

〔六〇頁〕

4 救—甲乙注「拔」 然—甲乙「燃」 5 之(上・中)—甲乙注ナシ 6 凝—甲乙「疑」 者—甲乙注「者之」 11  
來—甲「米」

〔六一頁〕

3 飾—甲乙「飭」 路—注「路之」 全—注ナシ 不—甲乙注「不成」 6 卑—甲「早」 7 也—甲乙ナシ 9 屈  
—甲乙「生悟」・注冠「悟」 二云—甲乙「矣」 10 佛—甲乙「如來」・注ナシ 12 云云—甲ナシ 蒼—甲乙「倉」

驥―甲乙「驥」 故―甲乙「故也」 四―甲乙「四海」

〔六二頁〕

3 教―甲「我」 堪―甲ナシ 4 之(上)―甲乙ナシ 之中―甲「堪」・乙ナシ 惰―甲乙「墮」 5 可―甲乙注  
冠「不」 6 寐―甲乙「寢」 7 生(上)―乙注「生之」 終―甲乙「終之」 皆―甲注ナシ 得―甲乙注ナシ 生

(下)―甲乙注「生極樂」 8 所祈無―甲乙「無祈所」 9 密―甲乙「蜜之」 月―甲「觀」

〔六三頁〕

1 想―甲乙「相」 2 投―甲乙「捉」 散―甲乙「亂」 4 等―甲乙「等之」 5 世―甲乙「世之」 與―甲乙

「與之」 間―甲乙「間也」 6 之(下)―甲乙ナシ 8 朱之―甲乙「朱」 擲―甲乙「鄭」 白之―注「白」

〔六四頁〕

〔六五頁〕

1 藥王品―甲乙注ナシ 明明―甲乙「明」 3 也―甲乙注ナシ 亦―注ナシ 9 世所以下―甲「奈時寬永丙寅曆

林鍾吉晨 開板」・乙ナシ

## II 注 解

### 凡 例

一、頁數・行数の表示はIに同じ。

二、注を付したのは、主に引用に関するもので、他に、和風漢文的な語法など、本文読解に関して問題になる箇所を指摘した。辞書によって調べられる一般語や仏教語に関しては注を略した。

三、経論名は一般に用いられる略称によった。また、「大」は『大正新脩大藏経』、「名義抄」は『類聚名義抄』（観智院本）。

〔一頁〕

3 諸仏之秘要、衆教之肝心 『法華経』方便品「当知、是妙法諸仏之秘要」（大九一—一〇b）。参照、『三代実録』

貞観元年四月十八日条「夫真言教門、諸法之肝心、如来之秘要」。

3~4 心地観経日能観……究竟沈淪 同経卷八・観心品（大三一—三二七a）。

4 云云 本書では、引用の終りを示すのに用いられている。

5 心性之観与不観也 寛文本冠注に従い、上に「由」があった方がわかり易い。

6 挹其流者罕討淵源 『摩訶止観』一上「挹流尋源、聞香討根」（大四六一—a）。

6 何矧如予愚暗之者乎 『往生要集』上本「如予頑魯之者、豈敢矣」（正藏八四—三三a）。

7 兼濟 『莊子』列御寇篇「兼濟道物」。『無量寿経』上「慈恵博施、仁愛兼濟」（大一一—二七一c）。

7 聊 『名義抄』「イサ、カニ」（仏中五）。

11 強圉之載 『爾雅』釈天「太歳在丁、曰強圉」。注「季巡曰、万物皆剛盛未通、故曰強圉」。『淮南子』天文訓にも見える。

〔二頁〕

1) 2) 娑婆世界……解脱之基 『往生要集』上「今此娑婆世界、修道得果甚難。何者、受苦者常憂、受樂者常著。苦云樂云、遠離解脱」(大八四―四五c)。

2) 3) 經曰一人……是三途業 同文の經は不明。『法苑珠林』三四に引く『惟無三昧經』に「一念來、一念去、一日一宿、有八億四千萬念、念々不息、一善念者、亦得善果報、一惡念者、亦得惡果報」(大五三―五五二a)。『安樂集』卷下に引く『淨度菩薩經』にも類似の文が見られる(大四七―二〇a)。牧田諦了「天台大師の疑經觀」(『止觀の研究』所収)二〇二―三頁参照。

3) 4) 凡夫住世間、不知世間相 寬文本冠注に「妙玄三云、經言、凡人行世間、不知世間相。如來行世間、明了世間相。又出止三」とあるが未檢。なお、「世間相」は『法華終』方便品「是法住法位、世間相常住」(大九―九b)。  
5) 一期頃 「頃」は『名義抄』に「アヒタ」(仏下本二四)。但し、本来、短い時間を指し、このような用法は日本的。

5) 何為 『名義抄』「イカムカセム」(仏上八)。

5) 6) 且除……只思…… この対応はおかしいが、「暫く……はさておき、ただ……についてのみ考えてみるに」の意か。

7) 8) 法華疏云貪海……過於漆墨 『法華文句』四下(大三四―五三a)。

8) 9) 違順俱非之緣 参照、『成唯識論』三「受謂領納違・順・俱非境相為相」(大三一―一一c)。

6) 三毒等分惑 『摩訶止觀』八上「三毒偏發為三分。若等緣三境名為等分」(大四六一―二〇二b)。同四下(同、四五c)も参照。

9 慢幢未折、業海難傾 『止観輔行』二一二(大四六一九〇c)。

9~10 其心念念……悦其癡心 『摩訶止観』一上(大四六一四b)。但し、10常ナシ。

11 鎮 『名義抄』「トコシナヘ」(僧上一三七)。

11~12 止観云若其……惡念亦広 『摩訶止観』四下(大四六一四六c)。

〔三頁〕

1 日夜專飛名譽於四遠 『摩訶止観』一上「若其心念念欲得名聞四遠八方、称揚欽詠」(大四六一四b)。

1~2 先人後我 『摩訶止観』六上「先人後己、与拔弥篤」(大四六一七五c)。「空也聖人願文」(『本朝文粹』)に

「以先彼後我之思為思、以利他忘我之情為情」。上杉三四~三六頁参照。

2 濟 『名義抄』「スクフ」(法上五)。但し、これは漢語としては救済の場合であるが、ここはそれを掬い取る意に用いたものと思われる。

4 聚落田里 『法華経』随喜功德品「若巷陌聚落田里」(大九一四六c)。

5 桃李之開春風 白居易『長恨歌』「春風桃李花開夜」。

10~11 止観云凡愚……亦復如是 『摩訶止観』一下(大四六一八b)。水中月・鏡像・幻・化は『大品般若経』一・序品の十喻に出(大八一二一七a)、『大智度論』一一に説明されている(大二五一一〇c~一〇五c)。

〔四頁〕

4~5 止観云身如……法不現前 『摩訶止観』七上(大四六一九一b)

5 乍 『名義抄』「ナカラ」(仏上八一、僧下一一三)。ここで逆説的な助詞として用いているのは日本的用法。

- 7 譬如栴檀……不取片玉 参照、『晋書』郗詵伝「臣學賢良對策、為天下第一、猶桂林一枝、崑山之片玉」。
  - 7 攀 『名義抄』「ヨチテ」(仏下本一二七)。
  - 8 既入仏法宝山、不可空手而帰 『摩訶止観』四下「徒生徒死、無一可獲。如入宝山、空手而帰。深可傷歎」(大四六一四五b)。「往生要集」上「莫入宝山、空手而帰」(大八四一三九c)。
  - 9 名聞利養 『止観輔行』四一二「若為名聞利養、則累劫不得」(大四六一二五八b)。名聞利養は、『法華經』勸持品「為貪利養、説外道論議、自作此經典、誑惑世間人、為求名聞故、分別於是經」(大九一三六c)。
  - 9 以摩尼珠博一頭之牛 『摩訶止観』二上「如以摩尼珠博一頭牛」(大四六一一三a)。詳細は『般舟三昧經』上(大一一三一九〇七b)。一卷本では九〇〇b)。
  - 12 五頁1 千万人之中、遂其心最希也 参照、『往生礼讃』「若欲捨專修雜業者、百時希得一二、千時希得三五」(大四七一四三九b)。「往生要集」下に引く(大八四一八一b)。
- 〔五頁〕
- 1 2 大論云菩薩……果時甚少 『大智度論』四(大二五一八八a)。但し、「菴羅菓」↓「菴樹華」。他に『涅槃經』(南本)一三・聖行品(大二二六九二a)。また、『往生要集』上「魚子難長、菴果少熟」(大八四一四五c)。
  - 5 諸教所讚多在弥陀 『止観輔行』二一一(大四六一一八二c)。
  - 6 昔為娑婆聖主、始発心修行 『悲華經』によると、弥陀はむかし無諍念王という転輪王であった。(大三一一七四c以下)。
  - 7 要決云弥陀本願誓度娑婆 『西方要決』(大四七一〇四a)。

7) 8 釈迦勸曰、唯除食時、恒憶此事 『觀無量壽經』(大一一―三四二a)。

8 弥陀自曰、欲來生我國者、當念我 『般舟三昧經』一卷本「欲來生者、當念我名」(大一一―八九九a) 〓 b)。同  
三卷本、上・行品「欲來生我國者、常念我數々」(同、九〇五b)。「往生要集」下に引く(大八四―七七a)。

8) 9 或処云此界……到此間迎 法照『淨土五念法事讚』(大四七―四八〇c)。

〔六頁〕

1) 2 弘決云心性……仮立仮号 『止觀輔行』五―三(大四六―二九三b)。

4 鏡喻 『摩訶止觀』一下「譬如明鏡、明喻即空、像喻即仮、鏡喻即中」(大四六―一九a) 『止觀輔行』一―五「夫  
以事喻法、皆是分喻。於中鏡喻其意最親。(中略)有異伊字・天目故也」(同、一七五a)。

8 言語同斷……思慮処亡 『瓔珞經』下「言語道斷、心行処滅」(大二四―一〇一九c)。この表現は『摩訶止觀』  
に多く引かれる(例、二下、大四六―二二b)。

9 譬如如意珠放光明降七宝 『法華玄義』五下「如点如意珠中、論光論宝。光宝不与珠一、不与珠異、不縱不横、  
三法亦如是」(大三三―七四二c)。「降」は「ふらす」と訓むのであろうが、本来の漢文としてはおかしい用法。

〔七頁〕

1 修性不二 『十不二門』に一項を立てて論ずる(大四六―七〇三b)。修徳・性徳は『法華玄義』五下(大三三  
―七四一c)に出る。

1) 2 波即水 水波の喩は『大乘起信論』の水と風の喩(大三二―五八六b)に由来し、『十不二門』の修性不二  
の項にも用いられている。

- 2 3 釈籤云如於……後不合散 『玄義釈籤』四(大三三一八四〇c)。但し、3「感果」↓「得果」。
- 6 7 華嚴經曰三界……三無差別 『華嚴經』(六十卷本) 一〇・夜摩天宮菩薩說偈品「心如工画師、造種種五陰、一切世界中、無法而不造、如心仏亦爾、如仏衆生然、心仏及衆生、是三無差別」(大九一四六五c)。その他、同經二五・十地品「三界虚妄、但是一心作」(同、五五八c)。参照、『摩訶止観』一下「三界無別法、唯一心作、心如工画師、造種種色」(大四六一八b)。
- 7 8 義例云唯於……妙觀理等 湛然『止観義例』下(大四六一四五八a)。但し、8「於」ナシ。
- 8 9 止観云如破……一心中暎 『摩訶止観』二下(大四六一二〇b)。
- 9 10 起信論云三界……六塵境界 『大乘起信論』(大三二一五七七b)。
- 10 11 止観云又如……力故謂少 『摩訶止観』五上(大四六一五五c)。

〔八頁〕

- 7 撰論云処夢……在一刹那 無性『撰大乘論釈』六(三一—四一九a)。但し、「覚」↓「寤」。
- 7 莊周百年之蝶 『摩訶止観』五上「莊周夢為蝴蝶、翱翔百年、寤知非蝶亦非積歳」(大四六一五五c)。もとは『莊子』齊物論篇に出る。
- 7 烈士二生之夢 『大唐西域記』七(大五一—一九〇六c)九〇七b)。一烈士が夢に今生・来生の二生の夢を見た故事。『往生要集』上に引く(大八四—四〇c)四一a)。
- 7 8 円覚終日始知……猶如昨夢 『円覚経』(大七一—九一五a)。
- 8 9 唯識論云未得……生死長夜 『成唯識論』七(大三—三九c)。但し、「常」↓「恒」。『往生要集』上に引



く(大八四―四一a)。

12) 九頁2 觀彼世界……善根之境 天親『往生論』(大二六一―二三〇c) 二三一a) による。但し、『往生論』では

「廣大無邊際」と「宝性功德草」の間に八句、「過迦旃隣陀」と「大乘善根之境」の間に三十六句あり。また、「大乘善根之境」↓「大乘善根界」。「廣大無邊際」まで『往生要集』上(大八四―四三a) へb) に引く

〔九頁〕

2 砌 『名義抄』「ミキリ」(法中三)。ここは「場所、所」の意で、日本的用法。

3 瑠璃為地、金繩界道 『往生要集』上「以瑠璃為地、金繩界其道」(大八四―四二b)。もとは『觀無量壽經』「瑠

璃地上、以黃金繩雜廁間錯」(大一一―三四二a) による。

3) 5 凡八方上下……撰在此中 『往生要集』上(大八四―四三a) と同文。参照、『無量壽經』上「時法藏比丘、

撰取二百一十億諸仏妙土清淨之行」(大一一―二六七c)。

6 片蠡把海、寸管窺天 『漢書』東方朔伝「以筦闌天、以蠡測海、以莛撞鐘」。東方朔「答客難」(『文選』) に同文

あり。『莊子』秋水篇「是直用管闌天、用錐指地也、不亦小乎」。

6 適 『名義抄』「タマタマ マサニ ワツカニ」(仏上五〇)。

7 襄邑……錦繡 左太冲「魏都賦」(『文選』) に「錦繡襄邑、羅綺朝歌」。

8) 9 從宮殿行宮殿……從林地至林地 『往生要集』上「從宮殿至宮殿、從林地至林地」(大八四―四三b)。

9) 10 上膳甘味備七宝机 『往生要集』上「若欲食時、七宝之机自然現前、七宝之鉢妙味滿中」(大八四―四三a)。

10 自然衣服 『往生要集』上「応法妙服、自然在身」(大八四―四三a)。

10 光明周遍……春秋冬夏 『往生要集』上(大八四—四三a)と同文。参照、『無量壽經』上「亦無四時春秋冬夏、不寒不熱、常和調適」(大一二—二七〇a)。

11 12 妙華繽紛……供養於弥陀 『往生要集』上「天華妙色繽紛亂墮、宝衣嚴具旋轉來下、如鳥飛空下、供散於諸仏」(大八四—四三a)。もとは『法華經』分別功德品「雨旛檀沈水、繽紛而亂墮、如鳥飛空下、供養於諸仏(中略)天衣千万億、旋轉而來下」(大九—四四c)。

12 10頁1 孔雀鸚鵡……者進仏道 『往生要集』上「又覺雁鴛鴦鸞鵲鶴、孔雀鸚鵡伽陵頻迦等百宝色鳥、晝夜六時出和雅音、讚歎念仏念法念比丘僧、演暢五根五力七菩提分」(大八四—四二c)。もとは『阿弥陀經』「彼国常有種奇妙雜色之鳥、白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命之鳥、是諸衆鳥、晝夜六時出和雅音。其音演暢五根・五力・七菩提分・八聖道分、如是等法」(大一二—三四七a)。

〔一〇頁〕

4 語默作 『摩訶止観』二下「行住坐臥語默作作」(大四六一—一六b)。『往生要集』中(大八四—五六b)。

5 7 或住七宝……新生之人 『往生要集』上「或渡飛梯作伎樂、或騰虚空現神通(中略)或至宝池辺、慰問新生之人(中略)或同在宝池中、各坐蓮台上、互說宿命事(中略)或復登七宝山、浴八功池、寂然冥黙、誦誦解説」(大八四—四三b—c)。「寂然冥黙」は『法華經』序品に「又見菩薩寂然冥黙」(大九—一三a)。「誦誦解説」も同経に多く見える。例、法師功德品「若誦若誦若解説若書写」(大九—四七c)。

7 8 所語者……隨樂兮往 『往生要集』上「或共語十方諸仏利生方便、或共議三有衆生拔苦之因縁。議已追縁而相去、語已隨樂而共往」(大八四—四三b)。

9 〓 11 世世父母……随思而教誡 『往生要集』上「世世生生、恩所知識、随心引接」(大八四—四三c)。

12 〓 11 頁之 華菓之飾……円融之色 『往生要集』上「謂嚴淨地上有菩提樹、枝葉四布、衆宝合成。樹上覆宝羅網、

条間垂珠瓔珞。風動枝葉、声演妙法」(大八四—四五a)。「華菓之飾……紫金白銀」については、同上「池畔河岸

有旃檀樹。(中略)紫金之葉、白銀之枝、珊瑚之華、瑠璃之美」(大八四—四二c)。宝樹については、『無量寿経』

上(大一二—二七〇c)、『觀無量寿経』(同、三四二b)参照。「樹上覆羅網」以下については、『往生要集』上「衆

宝羅網、弥滿虚空、懸諸宝鈴、宣妙法音」(大八四—四二c) 〓 四三a)。もとは『觀無量寿経』「諸天<sup>(イ)</sup>宝纒<sup>(イ)</sup>弥覆樹上、

衆宝羅網滿虚空中」(大一二—三四三a)。なお、「樹上覆羅網」は「樹上に羅網を覆いかける」意であろう。

〔一一頁〕

2 〓 3 樹下有座……相好無辺 『往生要集』上(大八四—四五a)。

4 〓 5 一子之慈悲 『涅槃経』(南本)一五・梵行品「菩薩摩訶薩、修慈悲喜已、得住極愛一子之地」(大一二—二七

〇一a)。

4 〓 5 経曰清淨……者無厭足 『華嚴経』(八十卷本)四・妙嚴品(大一一〇—一六b)。

5 〓 6 青蓮眼鮮……之顛跌下 『往生要集』中に四十二相をあげる(大八四—五三b) 〓 五五b)うち、第九に仏眼

青白、二十九に世尊身皮皆真金色、二十七に胸有卍字、四十に足下千輻輪文を言う。

6 併被成平等慈悲 「併」は『名義抄』に「シカシナカラ」(仏上四)。「しかしながら」は「すべて、ことごとく」

の意。「被」は受身とも和風漢文の尊敬ともとれる。「成平等慈悲」は形としておかしいが、「平等の慈悲より成す

(成る)」の意であろう。

7 面輪円満……天帝之弓 『往生要集』中「面輪円満、光沢熙怡、端正皎潔、猶如秋月、双眉皎淨、似天帝弓」(大八四—五三b~c)。

8~12 双眉之間……出無量光 『往生要集』中「眉間白毫、右旋宛轉、柔軟如觀羅綿、鮮白逾珂雪。或次広観、舒之直長大、如白瑠璃筒。放已右旋、如頗梨珠。於十方面……」(大八四—五三c)。「於十方面」以下同文。

12~一二頁1 於中復有……百万光明 『往生要集』中・雜略観(大八四—五六a)と同文。但し、「相好」↓「好」「色」↓「光」。『要集』では、化仏ではなく、阿弥陀仏の描写。化仏に關しては、総相観に類似の文が見える(同五五c)。参照、『観無量寿経』「無量寿仏、有八万四千相。一々相中、各有八万四千随形好。一々好中、復有八万四千光明」(大一二—三四三b)。

〔一二頁〕

1~4 熾然赫奕……演說正法 『往生要集』中(大八四—五五c)と同文。但し、2「奕」↓「奕」(「奕」は辞書になし、「奕」がよい)。3「阿」ナシ、「在於」↓「在」。

4~5 從身諸毛……摂取不捨 『観無量経』「身諸毛孔、演出光明、如須弥山(中略)一一光明、遍照十方世界、念仏衆生、摂取不捨」(大一二—三四三b)。「一一光明」以下、『往生要集』中、下に引く(大八四—五六b、七四a)。

6~7 大般若経曰十方……所不能照 『大般若経』五六八・第六会・念住品(大七一—九三五c)。

10 普門塵数 『往生要集』中「三世十方諸仏世界、普門塵数無量法門」(大八四—五五c)。

11~12 冥顯益無……如薬樹王 智顛『観音玄義』上に釈名十義をあげるうち、第五が「薬樹」、第六が「冥顯」(大三四—八七七b以下)。

〔一三頁〕

1 六度光破六蔽 『往生要集』中「放檀光滅慳蔽罪、放戒光滅毀禁罪、放忍辱光滅瞋恚罪、放精進光滅懈怠罪、放禪定光滅散乱罪、放智慧光滅愚惑罪」(大八四―六五b)。

3 過去空王仏…罪今得仏 『往生要集』中(大八四―六五b)。もとは『観仏三昧海経』九・本行品(大一一―六八c)六八九a)。

4 6 観無量寿経曰観無…自然当現 『観無量寿経』(大一二―三四三c)。『往生要集』中(大八四―五六b)に引く。

6 7 観仏経曰從無…生死之罪 同文の箇所はない。『観仏三昧海経』二・観相品(大一一―六五五a) b)の取意。

8 中道白毫 『法華文句』二下「毫在二眉之間、即表中道常也」(大三四―二九a)。

8 9 華藏世界…中見法界 『華嚴経』(八十卷本)八・華藏世界品(大一一―三九b)。

11 忍辱之衣 『法華経』法師品「如来衣者柔和辱心是」(大九―三一c)。

12 13 中論云因縁…是中道義 『中論』四・観四諦品「衆因縁生法、我說即是無、亦為是仮名、亦是中道義」(大三〇―三三b)。天台ではこれを本文の形で引く(但し、最後の句は「亦名中道義」。例、『摩訶止観』一上、大四六一五c)。

〔一四頁〕

5 八功德水 『称讚浄土経』「極楽世界浄仏土中、处处皆有七妙宝池、八功德水弥満其中。何等名為八功德水。一

者澄淨。二者清冷。三者甘美。四者輕軟。五者潤沢。六者安和。七者飲時除飢渴等無量過患。八者飲已定能長養諸根四大、增益種種殊勝善根」(大一一一三四八c)。

6 如池魚之求江湖……同籠鳥之欣山藪 潘岳「秋興賦序」(『文選』)に「譬猶池魚籠鳥、有江湖山藪之思」。

11 連持 『止觀輔行』一—四「一期曰壽、連持曰命」(大四六一—七三b)。

11 未足三万日 白居易「对酒」に「人生一百歳、通計三万日、何況百歳人、人間百無一」。

〔一五頁〕

1 旃陀羅驅羊令至屠所步步近死地 『摩訶旃陀羅經』上「譬如旃陀羅、驅牛就屠所、歩々近死地、人命疾於是」(大一一〇〇七c)。「往生要集」上に引く(大八四—三九a)。

4 昨誇紅顔、今為白骨 『和漢朗詠集』下・無常の項に「朝有紅顔誇世路、暮為白骨朽郊原」(藤原義孝)。

4~5 朝露之底……愛子孫 白居易「秦中吟不致仕」に「朝露貪名利、夕陽憂子孫」。

5 一息出入……是名命終 『摩訶止觀』七上「大集云、出入息名壽命、一息不返即名命終」(大四六一九三c)。も

とは『大集經』二三・虚空目分・世間目品「息入出者名為壽命」(大三一—一六四b)。

6 万劫不復 『止觀輔行』四—二「一失人身、万劫不復」(大四六一—二五九b)。

6~7 中有羈路……不知辺際 『涅槃經』一一・聖行品(大一一—六七九a)。

8~9 難受梵天……獄黑闇中 『帝樹大士為禪陀迦王說法要偈』(大三二—七四七a)。「往生要集」上に引く(大

八四—四〇a)。但し、いづれも「熾然」↓「熾然」

9~10 譬如有人……下于地耳 玄覺『永嘉証道歌』「住相布施生天福、猶如仰箭射虚空、勢力尽箭還墜」(大四八一

二九六 a)。

10) 11 涅槃經曰一切……必有終尽 『涅槃經』二・純陀品(大一一六一二c)。

11) 16頁2 馬鳴伎声唱曰有為……常呵此身 『付法藏因緣伝』五(大五〇一三一五a)。「往生要集」上に引く(大

八四一四〇b)。但し、「有為諸法」は『付法藏伝』では単に「有為」、「往生要集」では「有為諸法」。「如空中雲：

…猶如芭蕉」は『維摩経』上・方便品「是身如芭蕉、中無有堅、(中略)是身如浮雲、須臾變滅」(大一一四一五三九

b)。

〔一六頁〕

4) 5 以石毒宝藥……如下出之 二二頁9参照。

3) 4 如浮雲如……終不保故 『大智度論』二「咄、世間無常、如水月芭蕉、功德滿三界、無常風所壞」(大二五

一六九b)。

6) 7 經說六根……見世所有 『法華経』法師功德品(大九一五〇a)。

11) 12 得法性明鏡身、無像而不現也 『止觀輔行』一—四「報仏相者、心得法性明鏡身、故無像不現」(大二六一六

七b)。

〔一七頁〕

1 荆溪大師釈云不離同居穢、見同居淨 『法華文句記』一〇下(大三四一三五五b)。

1) 2 深信觀成人於娑婆界見四種仏土 参照、『法華経』分別功德品「又見此娑婆世界、其地瑠璃坦然平正、閻浮

檀金以界八道、宝珠行列、諸台樓觀皆悉宝成、其菩薩衆咸処其中、若有能如是觀者、当知是為深信解相」(大九一

四五b)。

3 猶如於一……猛火等也 參照、『涅槃經』二九・師子吼菩薩品「設遙見水生意往趣、到則變成猛火膿血」(大一二

一七九六b)。

4~5 只執其穢……取瓦礫乎 參照、『維摩經』上・仏国品「爾時螺髻梵王語舍利弗、勿作是意、謂此仏土以為不

淨。所以者何。我見釈迦牟尼仏土清淨、譬如自在天宮。舍利弗言。我見此土、丘陵坑坎、荊棘沙礫、土石諸山、穢

惡充滿。螺髻梵言。仁者心有高下。不依仏慧、見此土為不淨耳」(大一一四一五三八c)。

5~6 薬王品説如……生蓮華中 『法華經』薬王菩薩本事品(大九一五四c)。「乃至」の箇所、經文には「阿弥陀

仏大菩薩衆圍繞住処」とある。

9 見諸仏如来、猶如晴夜見星 『摩訶止観』二上「能於定中見十方現在仏在其前立、如明眼人清夜觀星」(大四六

一一二a)。

10~11 同居淨土之氣分 『法華文句記』一〇下「安樂行是同居淨土行之氣分也」(大三四一三五五b)。

〔一八頁〕

1 忽 「イルカセ、オコタル」(『名義抄』法中八三)などの意に用いているか。

2~3 淨名經曰雖知……化於群生 『維摩經』中・仏道品(大一一四一五五〇a)。

6~7 往生極樂……期果報也 『往生要集』上「応知、念仏修善為業因、往生極樂為華報、証大菩提為果報」(大

八四一五二b)。

〔一九頁〕



2) 3 止観云若内……其相如是 『摩訶止観』五下(大四六一六〇a)。

3) 4 弘決云当知……遍於法界 『止観輔行』五—三(大四六一二九五c)。

6) 8 蓮華三昧経曰帰命……礼心諸仏 『蓮華三昧経』(続蔵一—三一五一四〇九)。

8) 9 般若経曰仏法……棄身何求 未檢。

9) 10 華嚴経曰若人……造諸如来 『華嚴経』(六十卷本)一〇・夜摩天宮菩薩説偈品(大九—四六六a)。但し「了

知」↓「求知」。

10) 11 法華玄義云若衆……蘊在衆生 『法華玄義』二上(大三—一六九三a)。

11) 12 浄名経曰諸仏……心行中求 『維摩経』中・文殊師利問疾品「又問、諸仏解脱、当於何求。答曰、当於衆生

心行中求」(大—四—五四四c)。

〔二〇頁〕

1 於菩提中……而起纏縛 智顛『法華三昧懺儀』(大四六一九五三a)~b)。

3 如竹木中火性 参照、『大乘起信論』「如木中火性、是火正因。若無人知、不仮方便、能自燒木」(大三—一五七

八c)。

4) 5 究竟一乘宝性論云若無……求涅槃樂 『究竟一乘宝性論』三(大三—一八三一a)。

5) 6 弘決云自非……力在真如 『止観輔行』四—三(大四六一二六八a)。

6) 7 大乘止観云但為……浄之用也 『大乘止観法門』三(大四六一六五六b)。

7) 8 達多之預……界之宝蓮 『法華経』提婆達多品(大九—三四b)~三五c)。

11 衣裏繫珠 『法華經』五百弟子授記品「以無価宝珠、繫汝衣裏」(大九―二九 a)。

12 二頁 1 金鉢論云阿鼻……凡下一念 『金剛鉢』(大四六―七八一 a)。但し、「極聖」↓「極聖之」、「凡下」↓「下凡之」。

〔二二頁〕

4 5 観音玄云闡提……惡不得起 智顛『観音玄義』上「問。闡提不断性善、還能令修善起。仏不断性惡、還令修惡起耶。答。闡提既不達性善、以不達故、還為善所染、修善得起、広治諸惡。仏雖不断性惡、而能達於惡、以達惡故、於惡自在、故不為惡所染、修惡不得起、故仏永無復惡」(大三四―八八二 c)。

6 婉 「婉」はわかいこと。寛文本によると、一本は「姪」とあり(甲・乙本同じ)、「孩」の誤写ではないかとする。

7 8 義例云仏本……徙何而立 『止観義例』上(大四六―四五〇 c)。

12 平 寛文本に「ヲヤ」と訓んでいる。感歎を示すか。

〔二二頁〕

4 5 仁王經曰菩薩……煩為菩提 『仁王般若經』中・二諦品(大八一―八二九 b)。

5 6 妙樂大師云迷則……果中勝用 『法華文句記』七下(大三四―二九二 b)。

7 8 如福德人之執瓦礫而成金宝 『摩訶止観』一下「願我得仏、能為衆生説秘密藏。如福德人執石成宝、執毒成藥」(大四六―七 a)。

9 11 弘決云石毒……如成宝等 『止観輔行』一―四(大四六―一六九 a)。

〔二三頁〕

2) 3 止観云若徒……切法是心 『摩訶止観』五上(大四六一五四a)。

5) 6 金鉚論云万法……由随縁故 『金剛鉚』(大四六一七八二c)。

8) 9 観無量寿経曰諸仏……生心想中 『観無量寿経』(大一一一三四三a)。

9 水精珠入泥濁水即澄浄也 『大智度論』三六「譬如清浄池水、狂象入中、令其混濁。若清水珠入水則清浄。不得

言水外無象無珠。心亦如是。煩惱入故能令心濁。諸慈悲等善法入心令清浄」(大二五一三二五c)。『止観輔行』一  
四に「如大池水象入則濁、珠入則清」の形で引く(大四六一七三c)。上杉文秀氏は飛錫『念仏三昧宝王論』一

「清珠下於濁水、濁水不得不清。仏想投於乱心、乱心不得不仏」(大四七一三四a)を挙げる。

11 旁 『名義抄』「カタく」(法上九二)。「あれこれと」の意の日本的用法と見る。

〔二四頁〕

2) 3 止観云無明……如彼醜翻 『摩訶止観』五上(大四六一五五c)。

4 情 『名義抄』「ツラく」(仏上二〇)。「よくよく」の意の日本的用法。

5) 7 止観云無明……有種種夢 『摩訶止観』五上(大四六一五六b)。

10) 12 有五衰苦……兩目頻眇 『往生要集』上では『六波羅蜜経』(大八一八七八a)により、次の五を挙げる。

「一頭上華鬘忽萎、二天衣塵垢所著、三腋下汗出、四兩目數眇、五不樂本居」(大八四一三九b)。本書と第三が異なっている。

11 視胸異 『涅槃経』一一・聖行品「彼時二王(頂生王と帝釈天)形容相貌等無差別、唯有視胸為別異耳」(大一二

一六八〇b)。灌頂『涅槃經疏』一四に「天王壽長故胸疏、人王壽短故胸數」(大三八一—二六a)。

〔二五頁〕

1) 2 正法念經曰天上……六不及一 『正法念經』二三・觀天品(大171—131b)。『往生要集』上に引く(大八四—三九b)。

4) 5 宝積經曰若男……觸於牆壁 『大宝積經』五五・仏為阿難說処胎品「若男若女、適正墮地、或以手捧、或衣

承接、或在床席、或在屋中、或復地上、或迴露処、或在日中、或冬夏時、冷熱風觸、此身初生、受大苦惱、如生剝牛、觸於牆壁」(大1—1325a)。『往生要集』上では「取意」として本書と同じ形で引く(大八四—三八c)。

6) 7 法句經曰少時……思故何速 『法句經』上・老耄品(大4—565c)。但し、前半の「少時如意、老見蹈踐」を欠く。『法句譬喻經』三・喻老耄品(大4—593a)には全句揃っているが、前二句と後二句の間に六句はいつている。

7 霜蓬凍梨 二つを列ねる例として、伝空海『玉造小町子壯衰書』に「頭如霜蓬、膚似凍梨」(『弘法大師全集』第五卷一頁)。

8 奔車易転 『韓非子』安危篇に「奔車之上無仲尼、覆舟之下無伯夷」。

10 一大不調……四百四病 参照、『大智度論』五七(大25—四六九c)。

〔二六頁〕

1) 3 止観云不推……惡業熾盛 『摩訶止観』八下(大46—110a)。但し、「推」↓「惟」。

9) 12 弘決云人命……不修善本 『止観輔行』四—二(大46—259b)。11「煖」↓「暖」、「遇」↓「遭」。

12) 二七頁2 普賢十願云臨命……不相捨離 『華嚴經』(四十卷本) 四〇(大一一〇一八四六c)。

〔二七頁〕

3) 4 宝積經曰父母……業常隨逐 『宝積經』九六・勤授長者会(大一一一五四二b)。『往生要集』上に引く(大八四―三九c)。

4) 5 止観云四方……誰訪是非 『摩訶止観』七上(大四六一九三c)。『往生要集』上(大八四―三九a)に引く。

6 尺波不返、長夜一去 この前後の字句は『文選』などを踏まえている。例えば「尺波」は陸士衡「長歌行」、「長夜」は曹子建「三良詩」など。

8) 9 罪業応報経曰日出……常速過是 『罪業報応経』(大一一七―四五二a)。『往生要集』上(大八四―三九a)。但し、「高貴」↓「豪貴」、「無常速」↓「無常復」。『要集』では本書と同じ。

〔二八頁〕

1 啓手之期 『論語』泰伯篇「曾子有疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手」。

9 投多百躡繕那洞燃猛火 『往生要集』上「墮多百躡繕那洞然猛火中、雖呼天扣地、更有何益乎」(大八四―三九c)。

11) 12 竜樹云夫造……獄嬰諸苦 『竜樹菩薩為禅陀伽王說法要偈』(大三二―七四六a)。『往生要集』上(大八四―四〇a)。

〔二九頁〕

2) 3 与天帝闘……變成刀劍 『法華玄義』六下「与諸天為懺、懷怖畏。雷鳴謂為天鼓、竜雨變成刀劍」(大八四―七五九a)。

- 3 日月三時苦自來逼害 『往生要集』上「日三時苦具自來逼害」(大八四—三七c)。
- 4 生在畜生……為之被害 『竜樹菩薩為禪陀迦王說法要偈』に「於畜生中苦無量、或有繫縛及鞭撻、無有信戒多聞故、恒懷惡心相食噉、或為明珠羽角牙、骨毛皮肉致殘害」(大三—七四七b)。「往生要集」上に「無有信戒……相食噉」の二句を除いて引く(大八四—四〇b)。
- 6 但念水草余無所知 『法華經』譬喻品(大九—一五c)。
- 6 慳貪嫉妬之因、受餓鬼飢饉苦 『正法念處經』一六「慳貪嫉妬者墮餓饉道」(大一—七九二a)。「往生要集」上に引く(大八四—三七c)。
- 6 一万五千歲 『竜樹菩薩為禪陀迦王說法要偈』に「罪業緣故壽長遠、經有一万五千歲」(大三—七四七b)。「往生要集」上に引く(大八四—四〇b)。「要集」には「以人間一月為一日夜成年月、壽五百歲」ともある(同、三七b)。
- 7 欲臨河而掬水化成猛火 『往生要集』上「適望清流、走向趣彼、有大力鬼、以杖逆打、或変作火」(大八四—三七b)。「要集」には『瑜伽論』によるとあるが、『瑜伽論』では「變成膿血」(大三〇—二九七b)。
- 8 屠子続命 『六波羅密經』三「復有餓鬼、朝産五子、随産食子、夜生五子、随生食之」(大八—八七六c)。「要集」上に取意の形で引く(大八四—三七b)。
- 8 碎腦扶身 『大智度論』一六「或有餓鬼、自破其頭、以手取腦而舐」(大二五—一七五c)。「要集」上に引く(大八四—三九b)。
- 9~10 瑜伽論云口如……無由噉之 『瑜伽師地論』四に「彼有情口或如針、口或如炬、或復頸癭、其腹寬大。由此

因縁、縦得飲食、無他障礙、自然不能若噉若飲」とある（大三〇—二九七b）が、この引用と合致しない。ところが、『往生要集』上に本書と同文で出ており（大八四—三七b）、そこに「瑜伽論」とある。恐らくそれに依つたものである。

11) 12 八万由旬……七重鉄墻 『観仏三昧経』五・観仏心品「阿鼻地獄、縦広正等八千由旬。七重鉄城、七層鉄網」（大一一一六六八c）。『往來要集』上に「彼阿鼻城、縦広八万由旬、七重鉄城、七層鉄網」（大八四—三五c）。

〔三〇頁〕

1) 5 四角有四……集鉄城中 『往生要集』上に「四角有四銅狗。身長四十由旬。眼如電、牙如劍、齒如刀山、舌如鉄刺。一切毛孔皆出猛火。其烟臭惡、世間無喻。有十八獄卒。頭如羅刹、口如夜叉。高四由旬。牙頭火流滿阿鼻城。頭上有八牛頭。一一牛頭有十八角、一一角頭皆出猛火（中略）一一隔間有八万四千鉄蜂（イ蟒）大蛇。吐毒吐火、身滿城内。其蛇哮吼如百千雷」（大八四—三五c）三六a）。『要集』のこの箇所は「観仏三昧経略抄」とある通り、『観仏三昧経』五・観仏心品（大一一一六六八c）にほぼ拠っているが、例えば「其蛇哮吼如百千雷」は『観仏三昧経』では「其蛇哮吼如天震雷」となっている。本書の記述は『要集』に近い。

6 異人受苦果、自業所招受大苦惱 『正法念処経』七・地獄品「非異人作惡、異人受苦報。自業自得果、衆生皆如是」（大一一七一—三六b）。

6) 7 譬如夜蛾之不知燒愛火而競入 『心地観経』六・離世間品「譬如飛蛾見火光、以愛火故而競入」（大三—三一八a）。

7 春蚕之不知煮食桑而自纏 『心地観経』一・序品「一切衆生以愚癡故、食五欲樂、造五逆罪。入諸地獄、輪轉無

窮。自業所因受大苦惱。如世蚕繭目為縈纏」(大三―二九三b)。「涅槃經」二五・師子吼菩薩品「如蚕作繭自生自死」(大二―七六八c)。蛾と蚕を重ねる例として、『摩訶止観』五上「愛繭自纏、癡燈所害」(大四六一五五c)五六a。本書四〇頁に引く。また白居易「江州赴忠州至江陵舟中作詩」に「燭蛾誰救活、蚕繭自纏縈」。

7 9 正法念經說焦熱地獄云若以……豈可忍哉 『正法念經』一〇・地獄品「如是惡火、以胡麻許、若置山林若國若洲、能速燒尽一閻浮提。何況地獄受罪人身。如是惡火燒罪人身、如生酥塊」(大七一七五五b)。但し、本書と同文の形は『往生要集』上に「正法念經」として見られる(大八四―三五a)。

〔三一頁〕

1 午頭 甲本により「午」を「牛」に改める。

1 3 心是第一……族不能救 『往生要集』上(大八四―三三c)と同文。もとは『正法念經』六・地獄品の偈で、前半(「到閻羅所」まで)と後半は別の箇所に出る(大―七一―二九c、三二c)。3 「親族」は『正法念經』『往生要集』ともに「親眷」。但し、大正藏の「要集」異本には「親屬」。本書甲乙本では「親屬」。

4 5 竜樹云若復……不及其一 『竜樹菩薩勸發禪陀迦王說要偈』(大三―七四七b)。「往生要集」上(大八四―四〇b)に引く。但し、もとの偈では、「鑽」↓「鑽」(三・宮本。麗本では「予鑽」↓「鉞擻」、「阿鼻地獄」↓「阿毘獄」、「不及一」↓「不及其一」。「要集」の引文は本書と同形。

6 剝割燒煮之害 『摩訶止観』一上「謂地獄種種差別、剝割割截燒煮剝切」(大四六一五b)。

8 10 止観云自從……流轉生死 『摩訶止観』四下(大四六一三九c)。

12 以中道藥府藏治無明病淵源 参照、『止観輔行』六一―「上上法藥、応治塵沙無明之病」(大四六一三四一c)。



〔三二頁〕

2 我心自空罪福無主 『觀普賢經』(大九—三九二c)。

3 止觀云了達……露一時失 『摩訶止觀』四上(大四六一四〇b)。5 「十方諦求、我不可得」は『法華經』譬喻品に「十方諦求、更無余乘」(大九—一五a)。6 「深達罪福相、遍照於十方」は『法華經』提婆達多品(大九—三五b)。

5 弘決云寂靜……為寂靜門 『止觀輔行』四—二(大四六一二六〇b)。

5 弘決云此中……妄計仮名 『止觀輔行』四—二(大四六一三六〇b)。

7 弘決云昔從……枝条自傾 『止觀輔行』四—二(大四六一二六〇b)。但し、「乃至貪瞋」↓「乃至貪瞋癡」、「既去」↓「既亡」。

〔三三頁〕

1 中道無性即仏種 『法華文句』四下「知法常無性者、実相常住無自性、乃至無無因性。無性亦無性、是名無性。仏種從縁起者、中道無性即是仏種」(大三四—五八a)。

2 是性是則三因仏性 『法華文句』四下「又無性者即正因仏性也。仏種從縁起者即是縁了。以縁了了正種得起」(大三四—五八a)。

3 三千在理……咸称常楽 『玄義釈籤』一四(大三三一九一九a)。

4 菩提心論云妄心……心源空寂 前樹『菩提心論』(大三一—五七三a)。

7 一家所立……亦無所在 『金剛鉚』「一家所立不可思議境、於一念中理具三千、故曰念中具有因果・凡聖・

大小・依正・自他。故所変処無非三千。而此三千性是中理、不当有無、有無目爾。何以故。俱実相致。実相法爾、具足諸法。諸法法爾、性本無生。故雖三千有而不有、共而不雜、離亦不分。雖一一遍亦無所在（大四六一七八五b~c）。

8 更互 二字で「たがいに」の意。

9 趣一是趣不過 「一切法趣□、是趣不過」の形は『小品般若經』一五・知識品（大八一三三二c）三三三c）に頻出。『小品般若經』では六・大如品に「一切法趣空、不過是趣」等の形で見える（大八一五六一c）。対応する梵本 *Aśśāśāśrikā-prajñāpāramitā-sūtra* 249a' *śūnyatāgārikā hi Śubhūte sarvadharmāḥ. te tāṃ gatīm na vyatīvartante. 250a' (Vaidya 校訂本 p. 148 ll. 30-31) '「一切法は空を抛り所とし、この抛り所を越え出ることはない」の意。『摩訶止観』八下にも「是趣不過」の形が見える（大四六一一〇c）。*

10 一念三千 寛文本等は「一念の三千なれば」と読むが、ここは「一念と三千とは」の意に解した方がよい。

〔三四頁〕

1 一家終窮之極説 『止観輔行』五—三「故至止観正明観法、並以三千而為指南。乃是終窮究極説」（大四六一—九六a）。

2 淨石居士杜口 『維摩經』中・入不二法門品「時維摩默然無言」（大一一四—一五五—c）。

2 満願尊者默念 『法華經』五百弟子受記品「我等於仏功德、言不能宣。唯仏世尊能知我等深心本願」（大九—二七b）。

6 譬如大富……所傷 『摩訶止観』一下（大四六一八c）。但し、「譬如」↓「如」。

- 9 踰躑辛苦 「踰躑」は「踰躑」に同じ。『法華經』信解品「踰躑辛苦五十余年」(大九一七b)。但し、麗本では「踰躑」は「伶俚」。「踰躑」は「行くこと正しからざるなり」と解される(慧琳『一切經音義』九九等)。
- 10 12 大師釈云一念……不可思議 『摩訶止觀』一下(大四六一〇b)。

〔三五頁〕

- 1 阿字有三諦義 一行『大日經疏』七「阿字有三義。謂不生義・空義・有義」(大三九一六四九b)。
- 3 玄枢引有頌云人生……帰心空寂 『玄枢』は現存せず。『宋高僧伝』四の元康の伝に『玄枢』二卷の著述があったと伝え(大五〇一七二七c)、從義『三大部補注』一にもそのまま引く(続藏一四四一三一七二左)。寛文本はこの『補註』を引く。『東域伝燈録』にも『玄枢』をあげており(大五五一一一六四c)、日本に伝わっていたことがわかるが、ここでは撰者名がなく、しかも一卷となっている。
- 5 成仏有六即位 成仏に六即を立てるのは安然『即身成仏義私記』(仏全新四一六八a以下)。
- 5 止觀云譬如……六喻可解 『摩訶止觀』一下(大四六一〇c)。
- 6 7 弘決云家有……究竟即也 『止觀輔行』一一五(大四六一八〇b)。
- 7 大經貧女譬 『涅槃經』八・如来性品(大一一六四八b)に出る。
- 8 直至道場 『法華經』譬喻品「乘此宝乘、直至道場」(大九一一五a)。
- 8 譬中明珠 『法華經』安樂行品「以此難信之珠、久在譬中、不妄与人、而今与之」(大九一三九a)。
- 8 無上宝聚 『法華經』信解品「無上宝聚、不求自得」(大九一一七c)。
- 10 12 無明毒氣深入、不堪妙法良藥 『法華經』如来寿量品「然与其藥而不肯服、所以者何。毒氣深入、失本心故

故」(大九一四三a)。

11~12 孔丘云良藥……至利於行 『孔子家語』四・六本第十五。

〔三六頁〕

6~10 止觀云若依……見一切事 『摩訶止觀』五上(大四六一五四b)。

11~12 中論云諸法……故說無生 『中論』一・觀因緣品(大三〇一二b)。但し、「説」↓「知」。

〔三七頁〕

1 三種愛 『往生要集』中「転境界・自体・当生三種愛、令得念仏三昧成就往生極樂」(大八四一七〇c)。

2 觀無生懺悔 『金光明文句』三「無生懺(異本「懺悔」)者、如普賢觀云、端坐念実相、如月照霜露」。

3 造次顛沛 『論語』里仁篇「君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是」。

3 谷響 『大品般若經』一・序品の空の十喩の一に「響」がある(大八一二一七a)。「大智度論」六参照(大二五

一〇三a)。

3 施火輪 次の乾達婆達と関連させたものとして、『大智度論』六「捷達婆城、衆縁亦無。如旋火輪、但惑人目」

(大二五一〇三b)。

5~6 以心有故……切皆空也 『止觀輔行』五一三(大四六一二九三a)。

6~8 法華玄云心如……名心為妙 『法華玄義』一上(大三三一六八五c)。但し、「言其無」↓「適言其無」。

9~10 心地觀經曰心如……所策役故 『心地觀經』(大三一三二七b)。「不暫住故」と「心如僮僕」の間に、「心如

画師、能画世間種々色故」あり。

12 〓三八頁1 普賢觀經曰釈迦……名常寂光 『觀普賢經』(大九〓三九二c)。なお、このあたりは『法華三昧懺儀』によっている。「所謂十悪五逆、猶如猿猴、亦如麤膠、処処貪著、遍至一切六情根中。此六根業、枝条華葉、悉滿三界二十五有一切生死。亦能增長無明老死根本、衆苦之源。如經中説、釈迦牟尼毘盧遮那遍一切処」(大四六〓九五三a)。

〔三八頁〕

1 〓2 寂光理通……如像如飯 『法華玄義』七上(大三〓三七七a)。但し、「隔異」↓「別異」。

2 〓3 一色一香無非中道 『摩訶止観』一上(大四六〓一c)。

3 妄想分別、受諸熱惱 『法華三昧懺儀』(大四六〓七五三a)。

4 〓5 心地観経曰如是……生便解脱 『心地観経』八・観心品(大三〓三二八a)。

6 上所引文曰令此……露一時失 『摩訶止観』四上(大四六〓四〇b)。三二頁6 〓7に引く。

7 〓8 如千歳闇……衆闇悉除 『摩訶止観』一下「如百年闇室、若然燈時、闇不可言我是室主、住此久而不肯去、

燈若生、闇即滅」(大四六〓一〇a)。

8 未曾有経曰前心……如炬消闇 『未曾有経』下(大一七〓五八二b)。

10 〓11 普賢観経曰衆罪……悔六情根 『觀普賢経』「如是相者、名大懺悔、名大莊嚴懺悔、名無罪相懺悔、名破壞心

識」(大九〓三九三a)。

12 〓三九頁5 心地観経明理懺悔云一切……来無上道 『心地観経』三・報恩品(大三〓三〇四a)。但し、「罪障」

↓「罪性」、「唯」↓「惟」。『往生要集』中に引く(大八四〓六五b)。

〔三九頁〕

5 ~ 7 仏藏經念仏品曰見無……是真念仏 『仏藏經』上・念仏品(大一一七七八a ~ b)。但し、「見諸法実相」の上に二十四字、「無有分別」の上に一二七字略。又、下の「念仏」は「見仏」。『要集』中には本書と同じ形で引く(大八四一六五b ~ c)。

8 ~ 10 心地觀經曰在家……至於宝所 『心地觀經』三・報恩品(大三一三〇三c)。「乃至」の箇所、八句略。『要集』中には本書と同じ形で引く(大八四一六五c)。

10 ~ 11 修此懺悔、心如流水、不住法中 『觀普賢經』「行此懺悔者、身心清淨、不住法中、猶如流水」(大九一三九三a)。

11 ~ 四〇頁1 大論日念想……能見般若 『大智度論』一八(大二五一一九〇b)。「摩訶止觀」二下に引く(大四六一一六c)。「戲論心皆滅」は「止觀」では同文、『大智度論』では「言語法亦滅」。

〔四〇頁〕

2 ~ 3 三昧力故……摩頂說法 『般舟三昧經』(三卷本)上「持仏威神力、持仏三昧力、持本功德力、用此三事故、得見仏」(大一一三一九〇五c)。

3 ~ 4 譬如明鏡……魚石自現 『法華玄義』八下「無明豁破、如明鏡不動、淨水無波、魚石色像、任運自明」(大三三二七八二b)。

4 ~ 5 誰聞如是……冥無智者 『維摩經』中・仏道品(大一一四五〇b)。

6 ~ 7 安樂集引大經曰凡欲……提心為源 『安樂集』上(大四七一一七b)。「大經」は「無量壽經」のこと。同経・

下の三輩段に菩提心を言う(大一二―二七二b)。「往生要集」上に引く(大八四―四八b)。

- 8 〓四二頁8 止観云發真……心菩提義 『摩訶止観』五上(大四六一五五c 〓五六b)。十乘觀法中、第二發真正菩提心のほぼ全文。但し、四〇頁10「從」↓「縱」、「嬰」↓「縈」、四一頁1「逾遠」の下、四四字略、「亦然」の下、五二字略、2「煩惱無辺」↓「煩惱無數」、8「解脫道」の下に「云云」、10「誓」の上に「名」。四〇頁12「魚入箭口」は『太子瑞応本起経』に出る(大三四七五c)。四一頁10「与虚空共闘」は『大品般若経』一九・度空品(大八一三六〇c)。12「執瓦礫謂如意珠」は『大般涅槃経』二・哀歎品(大一一六一七c)による。3 〓4「如虚空中種樹使得花菓」は『思益経』二・問難品(大一一四二c)による。

〔四二頁〕

- 10 但開其心無境不轉之 『法華文句記』五中(大三四―二四六b)。但し、「之」なし。

- 11 〓12 觀造境即中、不見一法出法性 『摩訶止観』一上「初緣美相、造境即中、無不真實」(大四六一c)。

〔四三頁〕

- 1 〓6 繫縁法界……無二無別 『摩訶止観』一上(大四六一c 〓二a)。

- 9 〓10 止観云止能……衆宝皆獲 『摩訶止観』三下(大四六一二九c)。

- 12 〓四四頁4 大乘止観云譬如……俱成仏故 『大乘止観法門』四(大四六一六六二a 〓b)。

〔四四頁〕

- 6 〓7 鏡本明淨、塵積故闇 『莊子』徳充符篇「鑑明則塵垢不止、止則不明」。

- 12 〓四五頁1 迷悟是時用差別 『往生要集』上「煩惱菩提雖是一、時用異故、染淨不同」(大八四―四九b)。

〔四五頁〕

1) 2 經曰無辺……礼心諸仏 『蓮華三昧經』(統藏一—三一—四〇九右)。前出(一九頁8)。

3 不知貧女家有無量伏藏 『大般涅槃經』八・如來性品(大一一—六四八b)による。『摩訶止觀』一下に引く(大四六一—一〇c)。「不知貧女」は「貧女不知」の方がわかり易い。

3 日夜數他宝、自無半錢分 『華嚴經』(六十卷本)五・如來光明覺品(大九—四二九a)。

5 中我心 乙本「我心中」を採る。

9) 10 若為利養……功德甚多 『首楞嚴經』下「以輕戲心、貪利養心、隨逐他心、聞是三昧、而發菩提心。我皆知

此心与阿耨多羅三藐三菩提、得作因緣」(大一一—六三八b)。

12 攀付枝葉 『摩訶止觀』上「設厭世者翫下劣乘、攀付枝葉」(大四六一—四九a)。

〔四六頁〕

3) 4 妙樂大師云若依之修行、咸須口決 『止觀大意』(大四六一—四六一c)。

3) 4 弘決之四緣雖具、開導由師 『止觀輔行』四—一(大四六一—二五三a)。

4 五緣 『摩訶止觀』四上(大四六一—三六a)以下。

5 開導由師者 甲、乙本により「者」を一つ除く。

6 有種類種、有相對種 『法華文句』七上「種者、三道是三德種。淨名云、一切煩惱之儔為如來種。此明因煩惱道

即有般若也。又云、五無間皆生解脫相。此由不善即有善法解脫也。一切衆生即涅槃相不可復滅。此即生死為法身也。

此就相對論種。若就類論種、一切低頭举手悉是解脫種。一切世智三乘解心即般若種。夫有心者皆當作即法身種」(大



三四一九四b) c)。

7) 8 世智三乘……身如來也 前項の『法華文句』参照。

9 造像起塔……一称南無 『法華經』方便品「若人散乱心、乃至以一華、供養画像、漸見無数仏。或有人礼拜、或復但合掌、乃至举一手、或復小低頭、以此供養像、漸見無量仏(中略) 若人散乱心、入於塔廟中、一称南無仏、皆已成仏道」(大九一九a)。

9) 11 過去微善……封果報也 『文句記』五中(大三四―二四四a)。但し、「掣」↓「制」、「也」ナシ。

11 記云善鉢……宿善咸遂 『文句記』五中(大三四―二四四b)。

〔四七頁〕

2 以相對種……脱三徳也 四六頁6に挙げた『法華文句』参照。

3 大乘止観云但除其病而不除法 『大乘止観法門』になし。但し、『維摩經』に同文あり(大一一四―五四四a)。

5 雖心性如此、而我無始迷 『止観輔行』四―三「法性本浄、我無始迷」(大四六一―二六八a)。

7 発第一願 以下、四弘誓願を明す。四弘誓願は『摩訶止観』一下(大四六一―八a)等に説くが、『止観大意』によると、その名称は「衆生無辺誓願度・煩惱無数誓願断・法門無尽誓願知・仏道無上誓願成」で(大四六一―四六〇b)、本書と異なる。『往生要集』は、第一、二は本書と同じ、第三、四は法門無尽誓願知・無上菩提誓願証(大八四―四八c)。

7) 8 生死縛著……無有是処 『摩訶止観』六下(大四六一―八五b)。但し、「若」↓「能」。『維摩經』中・文珠師利問疾品「若自有縛、能解彼縛、無有是処」(大一一四―五四五b)。

- 8 弘決云為利他故先斷已縛 『止觀輔行』三—四(大四六一—二四八a)。
- 10 弘決云為度衆生故須習法門 『止觀輔行』一—四(大四六一—一六七b)。但し、「衆」ナシ。  
〔四八頁〕
- 2 釈籤云故如……鏡像果円 『玄義釈籤』一四(大三三—一九一九a)。
- 3 彌迦五百大願 『悲華經』七・諸菩薩授記品に出る(大三—二二二c)。
- 4 弥陀四十八願 『無量壽經』上(大—二—二六七c—七六九b)。
- 6 華嚴經曰菩薩……劫不能尽 『華嚴經』(六十卷本)六・賢首菩薩品(大九—四三二c)。但し、「涯際」↓「辺際」、「不能尽」↓「猶不尽」。『摩訶止觀』一上に本書の形で引く(大四六一—二a)。『往生要集』上にも引く(大八四—五一b)。
- 7 宝積經曰菩提……能容受者 『大宝積經』九六・勤授長者会(大—一—五四二c)。『要集』上に引く(大八四—五一c)。
- 8 法華疏云似解……声勝衆鳥 『法華文句』一〇上(「百千万倍」まで大三四—一三九b、それ以下は一三八c)。「好堅処地、芽已百匝」は『大智度論』一〇(大—二—五—一三—一c)、「頻伽在穀、声勝衆鳥」は同二八(大—二—五—二六七a)にもとづく。
- 9 菩提心論云若人……証大覚位 『菩提心論』(大三—二—五七四c)。
- 10 華嚴經曰譬如……所不能及 『華嚴經』(六十卷本)卷五九・入法界品(大九—七七八b)。但し、「波利質多羅樹」↓「波利質多樹」、「花」↓すべて「華」、「薰」↓すべて「熏」。『往生要集』上に引く(大八四—五一)

b)。

〔四九頁〕

2) 3) 止観引秘密藏經已云初菩……菩提心耶 『摩訶止観』一下(大四六一〇b)。この前に『如来秘密藏經』下

の文を引く(同、一〇a)。「若人父為縁覚而害、盜三宝物、母為羅漢而汚、不実事謗仏、両舌間賢聖、悪口罵聖人、壞乱求法者、五逆初業之瞋、奪持戒人物之貪、辺見之癡、是為十悪悪者。若能知如来説因縁法、無我人衆生寿命、無生無滅無染無著、本性清浄、又於一切法知本性清浄、解知信入者、我不説是人趣向地獄及諸悪道(下略)」。但し、經の原文(大一一七八四四c)はやや異なる。このうち、「能知如来説因縁法」が第一、「無生無滅」が第二、「本性清浄」が第三、「於一切法知本性清浄」が第四の菩提心。『往生要集』上では、『止観』所引の形で『密藏經』の文を引き(大八四一五一a)、「初菩提心」以下の『止観』の文も引く(同、五一c)

5) 10) 華嚴經中善財……所不能害 「譬如」以下、『華嚴經』(六十卷本) 五九・入法界品(大九一七七六c) 七七七a)。但し、「怖畏」↓「恐怖」(二箇所とも)、「煙不能熏」↓「熏不能害」、「邪見煙」↓「邪覚観煙」。

10) 11) 又云如得……而不沈没 『華嚴經』(六十卷本) 五九・入法界品(大九一七七七b)。但し、最初に「譬如有人」とあり、「不没溺」と「得菩提心」の間に「菩薩摩訶薩、亦復如是」とある。

11) 五〇頁1) 又云如得……諸煩惱病 『華嚴經』(六十卷本) 五九・入法界品(大九一七七七a)。但し、最初の「如」は「譬如有人」、「一切病」と「得菩提心」の間に「菩薩摩訶薩、亦復如是」とある。『往生要集』上に「譬如善見藥王滅一切病、菩提心滅一切衆生諸煩惱病」という形で引く(大八四一五一a)。

〔五〇頁〕

1) 2) 又云如有……菩薩善根 『華嚴經』(六十卷本) 五九・入法界品(大九一七七七a)。但し、「如有藥樹王」↓「譬如藥王樹」。

3) 4) 又云如衆……薩婆若色 『華嚴經』(六十卷本) 五九・入法界品(大九一七七七八) b)。但し、「如」↓「譬如須彌山」、「近須彌山」↓「近彼山」。

6) 7) 止觀云既不……何得出期 『摩訶止觀』一〇上(大四六一一三二a)。稠林曲木の喩は『大智度論』三五(大二五—三一六a) 参照。

7) 8) 種子豈不長雲雨之濕乎 『法華經』藥草喩品(大九一—一九a) 2) b) 参照。

8) 象牙必待天雷之声矣 『涅槃經』八・如來性品「不聞是經、不知如來微妙之相、如無雷時象牙上花不可得見。聞是經已、即知一切如來所說秘密藏性、譬天雷見象牙花」(大一二—六五二b)。『摩訶止觀』一上に引く(大四六一—三b)。

9) 10) 法華玄云若值……則失本心 『法華玄義』六下(大三三—七六一b)。

11) 12) 顏氏云与善……久而自臭 『顏氏家訓』慕賢篇。

12) 一頁1) 古人諺云凡人……器円則円 同趣旨の言は『荀子』君道、『韓非子』外儲説左上などに出るが、はっきりした出典は未検。

〔五一頁〕

1) 2) 或書云麻中……不染而黑 寛文本に『史記』を引くも未検。「麻中蓬」は『荀子』勸学などに出る。

2) 3) 心地観經云菩提……誠実難遇 『心地観經』三・報恩品(大三一三—三〇五a)。

3 論語云無友不如己 『論語』学而篇、及び子罕篇に出る。

4 心地觀經曰親近……法証菩提 『心地觀經』三・報恩品(大三一三〇五a)。

6 從知識經……但信法性 『摩訶止觀』一下「或從知識、或從經卷、聞上所說一實菩提(中略)若未聞時、処馳求、既得聞已、拳覓心息名止、但信法性、不信其諸、名為觀」(大四六一一〇b)。

7 三德秘藏……終至三德 『止觀輔行』一一二「秘藏之体、無始終等。無始而始、始修三觀。無終而終、終至三德」(大四六一一六〇b)。

11 五二頁1 金錚論云大師……竟無是事 『金剛錚』(大四六一七八六b)。但し、「大師歎佛法不思議云」↓「大師判教末云」。又、その次に「佛法不思議、唯教相難解」とある。該当する智顛の文は『浄名玄疏』六(大三八—五六二b)。

〔五二頁〕

2 彼造五逆……力得往生 『觀無量壽經』「下品下生者、或有衆生、作不善業五逆十惡(中略)如此愚人臨命時、遇善知識種種安慰、為說妙法、教令念仏(中略)如是至心令声不絶、具足十念、称南無阿弥陀仏。称仏名故、於念中、除八十億劫生死之罪。命終之時、見金蓮花猶如日輪住其人前、如一念頃、即得往生極樂世界」(大一一—三四六a)。

4 浄名経曰隨其心浄則仏土浄 『維摩経』上・仏国品(大一一五三八c)。

6 能觀心性得上定 『法華玄義』二上「涅槃云、一切衆生具足三定。上定者謂仏性也。能觀心性名為上定」(大三三—六九六a)。もとは『涅槃経』二五・師子吼菩薩品(大一一七六九b)に当るが、やや文が異なる。

- 7 遮障万端 『摩訶止觀』二下「根鈍千遍為說、兀然不解、多造罪障、遮障万端」(大四六一二〇a)。
- 8~9 文選云毛嬙……能掩其醜 王子淵「四子講德論」(『文選』)。
- 10~11 求淨土者千万、遂往生者一二 『往生禮讚』「若捨專修雜業者、百時希得一二、千時希得三五」(大四七一四三b)。「往生要集」下に引く(大八四一八一b)。
- 11~12 法華疏云觀己……速得己利 『法華文句』一上(大三四一二b)。
- 〔五三頁〕

- 1~3 論止觀文云見仏……得如実義 『摩訶止觀』二上(大四六一一c)。
- 3~4 弘決釈此文云見色……猶如鏡像 『止觀輔行』二一一(大四六一八四a)。
- 4 霜降鐘鳴 『山海經』中山經「有九鏡焉。是知霜鳴」。郭注「霜降則鐘鳴。故言知也。物有自然感応、而不可為也」。

- 5~6 金鉉論中実相……之所測等 『金剛鉉』(大四六一七八b)。五一頁11の箇所。
- 7 証悟実雖……本被下凡 『止觀輔行』三一二「証雖在聖、本教凡夫」(大四六一三三c)。
- 7~8 只知六即淺深可不懼不誇 『摩訶止觀』一下「聞一念即是、信故不誇、智故不懼(中略)為此事故須知六即」(大四六一〇b)。

- 9~10 何不修一……一円之果 寬文本傍注に『釈籤』七一六を指示するが未檢。
- 10 発心既僻越、万行徒施 『止觀輔行』一四「発心僻越、万行徒施」(大四六一六七a)。

〔五四頁〕

2) 3 止観大意云内順……不復改轍 『止観大意』(大四六一四六一c)。但し、「為種亦強」の後に「意氣博達、該括包籠」の二句あり。

4) 5 弘決云願諸……契無生忍 『止観輔行』二一五(大四六一二一六c)。

5) 6 一句染神、微劫不朽 『維摩経略疏』五(大三八一六二四c)。但し、「微」↓「弥」。「微」は不適。

6) 7 止観云皆以……堪任乘御 『摩訶止観』二下(大四六一一七c)。この前に「譬如綸釣魚強繩弱、不可争牽。

但令鉤餌入口、随其遠近、任縱浮沈、不久収獲。於蔽修観、亦復如是。蔽即惡魚、観即鉤餌。但使有魚、多大唯佳」とある。

10 於第一義、心不驚動 『観無量寿経』(大一二一三四五a)。

11) 12 以無始来……慮知之執 『止観輔行』五一三「以無始来随逐塵染、不知無縁体遍法界、唯随妄我慮知之執」

(大四六一三〇〇a)。

12) 五五頁2 華嚴曰譬如……所不能及 『華嚴経』(六十卷本) 五九・入法界品(大九一七七九c)。

[五五頁]

2) 3 弘決云縱使……功德猶多 『止観輔行』一一四(大四六一一七〇c)。

4) 5 縦交猛火……清涼之風 『無量義経』德行品「開涅槃門、扇解脱風、除世惱熱、致法清涼」(大九一三八四

b)。

7 在二途 「二」は「三」の誤り。甲・乙本は「三」。

8 彼調達婆藪之垂応迹於那落 『法華玄義』四上「彼地獄有、若有機縁闍慈悲、以王三昧力、法性不動而能応之。

如婆藪調達、示所宜身、說所宜法」(大三三—七二二a)。

8~9 觀音地藏之代泥梨之苦器 『聖觀音經』「亦遊戲地獄、大悲代受苦」(大二〇—三六b)。「地藏十輪經」一、

序品「或作剎魔王身、或作地獄卒身、或作地獄諸有情身、現作如是等無量無數異類之身、為諸有情、如応說法」(大三—七二六a)。

11 名字觀行位猶隔生則忘 『法華玄義』六下「若相似益隔生不忘。名字觀行益隔則忘」(大三三—七六一b)。

〔五六頁〕

1~2 象子力微……翻添氷聚 『摩訶止觀』七下(大四六一九九b)。前半は『往生要集』上(大八四—四六a)にも引く。

6~7 菩薩処胎經曰法性……証如反掌 『菩薩処胎經』四・五道尋識品(大一一—一〇三五c)。「法華文句」八下(大三四—一七a)に引く。

7~8 浄名疏云若見……自利利他 『維摩經略疏』五(大三八一六三七b)。

8~9 弘決云如太……正念者耶 『止觀輔行』八一—二(大四六一三九九b)。但し、「管檀」↓「灌檀」。

10~12 大集經曰月藏分中……退失神通 明白な該当箇所は不明。「講説」では『大集經』四九・月藏分令魔得信解品(大一一—一八c以下)の取意とする。

12~五七頁1 止觀云此金……越生死野 『摩訶止觀』五七(大四六一四九a)。

〔五七頁〕

1~2 弘決云若称……無非道場 『止觀輔行』四—三(大四六一二六四c)。



2 経曰即往安樂世界 『法華経』薬王菩薩本事品(大九一五四c)。

6 対火珠所成日輪時能取火 『摩訶止観』六下「如一珠向月生水、向日生水、不向則無水火」(大四六一八三a)。

7 大鵬覆影、子能生長者乎 『維摩経略疏』一「如大鵬影覆、子得生長」(大三八一五七四a)。

8 弘決釈發禪……冥加外護 『止観輔行』九一(大四六一四一三c)。

9 止観引大論云池華……沈溺未顯 『摩訶止観』九上(大四六一一八b)、『大智度論』一(大二五一六三a)の取意。

12 繫念定生之願 『無量寿経』の第二十願「設我得仏、十方衆生、聞我名号、係念我国、殖諸徳本、至心廻向、欲生我国、不果遂者、不取正覚」(大一一二六八b)。

12 聖聚来迎之誓 『無量寿経』の第十九願「設我得仏、十方衆生、發菩提心、修諸功德、至心発願、欲生我国、臨寿終時、仮令不与大衆围绕、現其人前者、不取正覚」(大一一二六八a)。

〔五八頁〕

1 空仮中三……徳三般若 三諦・三身・三宝・三徳・三般若等を関連つけたものとして、『法華玄義』五下の類通三法の箇所がある(大三三―七四四a以下)。

3 焼丸香……用衆河水 『摩訶止観』一上「首楞嚴経曰、擣万種香為丸。若焼一塵具足衆氣。(中略)大経曰、譬如有人在大海浴。当知是人已用諸河之水」(大四六一二c)。もとはそれぞれ『首楞嚴経』上(大一一五―六三三b)、及び『涅槃経』二二・光明遍照高貴徳王菩薩品(大一一七五三b)にもとづく。

5～6 慈恩云諸仏……不麁往生 『西方要決』(大四七一—〇七b～c)。『往生要集』下(大八四一—八四b)に引く。  
7～五九頁6 梁朝有一……仏者益多 雄俊の伝は偽撰戒珠『往生淨土伝』所収のものに近い(本稿Ⅲ・二参照)。  
〔五九頁〕

8 要之 「……でありさえすればよい」の意の日本の用法と思われる。

〔六〇頁〕

4 如救頭然 『摩訶止観』七上「如是観已、心大怖畏、眠不安席、食不甘哺、如救頭然」(大四六一—九四a)。

4 救 『名義抄』「フサム ハラフ タスク」(僧中五九)。

6 種種問橋、智者所呵也 『摩訶止観』一〇下「方等云、種種問橋、智者所呵」(大四六一—三七a)。『方等陀羅尼経』三(大二一—六五五b)にもとづく。

7 三界無安、猶如火宅 『法華経』二・譬喻品(大九一—四c)。

7～8 一箇偏苦……無所遁避 『摩訶止観』一下「三界無常、一箇偏苦、四山合來、無逃避処」(大四六一—八a)。

「一箇偏苦」は『涅槃経』二一・光明遍照高貴徳王品(大二一—七四二c～七四三a)、「四山合來」は同経二七・師子吼菩薩品(大二一—七八一c)にもとづく。

8～10 悉達太子……案後大苦 出典未詳。

〔六一頁〕

1 形無常主……神無常家 『賢愚経』一一・無惱指鬘品「形無常主、神無常家」(大四一—四二六c)。『仁王般若経』下・諸国品にも同文あり(大八一—八三〇b)。

4)5 大集經云妻子……世為伴侶 『大集經』一六・虛空藏菩薩品(大一一〇九a)。但し、「不隨者」↓「無隨者」。『往生要集』上(大八四―三九c)には本書と同じ形で引く。

7)9 天台云無壽……亦得居也 『維摩經略疏』一「二明同居淨土者、無量壽國、雖果報殊勝、難可比喩、然亦染淨凡聖同居。何者、雖無四趣而有人天。何以知之。生彼土者、未必悉是得道之人。故經云、犯重罪者、臨終之時、懺悔念仏、業障便轉、即得往生。若但聖生凡夫、何得願生彼土。故知、雖具惑染、持心亦得居也」(大三八―五六四b)。文中、「經云」は『觀無量壽經』下品中生段(大一二―三四六a)。

9)10 淨土論云若有……生安樂國 『講説』は迦才の『淨土論』とするが該当箇所はない。佐藤哲英氏は同書巻下(大四七―一〇二b)とする。

10)12 平等覺經曰阿弥……送著西方 『平等覺經』に相当する文はない。迦才『淨土論』下にこの文が出る(大四七―一〇二b)が、『平等覺經』に依るといふ記載はない。『往生要集』中には「無量清淨覺經云」として引く(大八四―一五八c)。「無量清淨覺經」は『平等覺經』に同じ。本稿Ⅲ・三参照。

12 蒼蠅之翔千里、付驢尾之故 『史記』伯夷伝「顏淵雖篤学、付驢尾而行益頭」。注に「索隱曰、蒼蠅付驢尾而致千里、以喩顏回因孔子而名顯」。

〔六二頁〕

4 卷舌無答 揚子雲「劇秦美新」(『文選』)に「礼官博士、卷其舌而不談」。

7 要決云上尽……皆得往生 『西方要決』(大四七―一〇四a)。

8 積功累徳 『法華經』提婆達多品(大九―三五b)。

- 8 隨聞一句 『法華經』法師品「若有人聞如法蓮華經乃至一偈一句、一念隨喜者、我亦与阿耨多羅三藐三菩提記」(大九—三〇c)。
- 9 併 『名義抄』「シカシナカラ アハス トモ」(仏上四)。
- 10 八功德池 『稱讚淨土經』「何等名為八功德水。一澄淨。二者清冷。三者甘美。四者輕軟。五者潤沢。六者安和。七者飲時除飢渴等無量過患。八者飲已定能長養諸根四大增益」(大一二—三四八c)。
- 11 六三頁3 大莊嚴論曰盛年……終必散乱 六三頁1「求修善」まで『大莊嚴論經』三(大四—二七一c)。以下は同経八(大四—三〇二c)。但し、六二頁12「食營」↓「但當」。同じく「戒禪」と「為死」の間に二句あり。六三頁1「觀察」↓「繫念」、「断除」↓「除破」、1・2「習心」↓「執心」、2「投」↓「捉」(本書甲乙本の形)、「不散」の下に一句あり。『往生要集』上(大八四—四一a)には本書と同じ形で引く。但し、六三頁2「投」↓「捉」。
- 〔六三頁〕
- 3 華嚴經曰如鑽……怠者亦然 『華嚴經』(六十卷本)五・明難品(大九—四二八c)。但し、「數息」↓「數休息」。
- 5 6 先德云一世……不求淨土 未檢。「二世勤修、是須臾間」は『無量壽經』下に出る(大一二—二七五c)。但し、「修」↓「苦」。
- 7 楊貴妃專房之寵 白居易「長恨歌」に出る。
- 7 潘安仁擲菓之戲 『蒙求』に出る。「擲菓」はこのままでは潘安仁が菓を擲げたことになるが、これではおかし

い。受身の意にとる。

7 季將軍之武勇 『蒙求』に出る。

7~8 曹子建之賢才 『蒙求』に出る。

8 陶朱之金玉之財 『蒙求』に出る。もと『史記』貨殖伝に出る。

8 擲白之衣食之富 『史記』河渠書。また班固「西郡賦」(『文選』)に「下有擲白之沃、衣食之源」。

10 北芒之塵 劉希夷「公子行」に「百年同謝西山日、千秋万古北邙塵」。

11 逝水 『論語』子罕篇「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍昼夜」。

11~12 山海空市無遁避者 『摩訶止觀』七上(大四六一九四a)。但し、「遁」↓「逃」。もとの話は『法句譬喻經』一に出る(大四一五七六c~五七七七a)。11「無常殺鬼」の話もそこに見える。

〔六四頁〕

6 釈云常為心師、不為心師 『涅槃經』二六・師子吼菩薩品「願作心師、不師於心」(大一一七七八c~七七九

a)。本書の形はわかりにくいのが、『涅槃經』と同義にとり、「常に心の師となりて、心を師となさざれ」と読むのであるう。

6~7 玄枢曰但正……諸塵有滯 未検。『玄枢』については、三五頁3参照。

7~9 弘決云是心……入筒則直 『止観輔行』二一一(大四六一八二a)。もとは『大智度論』二三(大二五

二三四a)にもとづく。

9 疏云若不……似盲執燭 『法華文句』と思われるが未検。寛文本傍注には「二一一一五十四」とする。

- 10 心不孤、必託於緣 『摩訶止觀』一下(大四六一八a)。
- 10 仮文助意 『止觀輔行』一一二「仮文助意、文有所拠」(大四六一五七b)。
- 12 六五頁1 経云汝等……諸仏之恩 『法華経』囑累品(大九一五二c)。  
〔六五頁〕
- 1 2 葉王品疏云我伝……師之志也 『法華文句』一〇下(大三四一四三a)。
- 2 断種之身 『法華経』譬喻品「断一切世間仏種」(大九一五a)。
- 2 3 史記云雖……之指麾也 『史記』淮陰侯伝。
- 4 若義理有……必加添削 参照、『往生要集』跋文「若猶有謬、苟不執之。見者取捨、令順正理」(大八四一八九a)。

### III 研究

#### 一、伝来と諸本

#### 1 伝来

周知の通り、『観心略要集』は江戸時代の三種の版本を残すのみで、それ以前の写本や刊本は現存しない。従って古い時代における流布の状況を知るには、目録類や他の書物への引用を調べる以外にない。

まず、目録等の記載であるが、最も信頼できる源信の伝記である『法華驗記』や『続往生伝』の源信伝に挙げられた著述目録にも、又、『東城伝燈録』にも記載がない。本書が記載されている目録として最も古いものは『浄土依憑經論章疏目録』（長西録）で、

観心略要集一卷

恵心僧郡

とある。即ち、十二世紀前半にはある程度流布するに到っていたことが知られる。ところで、仏全所収本の長西録の考証では、「恵已下四字一本作失名二字」とあり、源信の撰ということが未だ必ずしも確定的でなかったことが知られる。又、一本には「廿七丁」とあるが、本目録によると源信の『阿弥陀経略記』が廿五丁とあるのに較べ、それよりやや大きいことが知られる。現存の両者を較べると、『阿弥陀経略記』が恵全で五十八頁、『観心略要集』が六十六頁であり、ほぼ妥当する。以後の新しい目録類には本書の名前が源信撰として多く現われるが、資料的には大きな意味をもたない。

他の諸書への引用、言及としては、明確に書名を出しての引用は『二帖抄』（一流相伝法門見聞）まで下る。即ち、そこには次の二文が引用されている。

- 1、恵心師釈『観心略要集』云「只心是一切法者、随縁真如。一切法是心者、不変真如」<sup>(4)</sup>
- 2、『観心略要集』云「弘決」云、当知、身土一念三千、故成仏時、称此本理、一身一念遍法界矣、<sup>(1)</sup>尽無明十地惑、帰本覚真如理時、只是顯本有三千、始非得果位滿徳、我等一念心性、無始已來、<sup>(5)</sup>滿三身果徳、『蓮華三昧經』云、<sup>(6)</sup>帰命本覚心法身、常住妙法心蓮台、本来具足三身徳、三十七尊住心城、普門塵數諸三昧、遠離因果法然具、無辺徳海本円満、還我頂礼心諸仏矣」。<sup>(7)(5)</sup>

- ① 矣—底本・甲・乙「云云」
- ② 如理—底本「如之理」、甲・之・注「如理之」
- ③ 始非—甲・乙「非始」
- ④ 我—底本・甲・乙「爰知我」
- ⑤ 滿—底本・甲・乙「備」
- ⑥ 云—底本・甲・乙「曰」、注「云」
- ⑦ 矣—底本・甲・乙「云云」

(底本は寛文版『略要集』。甲・乙・注はⅡに同じ)

前者は現存諸本と全同、後者は注記したような相違はあるが、内容的に變りはない。『二帖抄』も写本自体は古いものではないが、ひとまず、心賀・尊海の頃(十四世紀前半)に『略要集』がほぼ現行本と近い形をとっていたと推定することは許されよう。なお、前者は心境義、後者は無作三身に関して引かれており、本書が浄土思想という面よりも天台の觀心の問題から見られている点は注目される。

次に、書名を明記しないもので本書と連関するものはないであろうか。実は、源空の『三部経大意』に次のような一句がある。

崑崙山ニ行テ玉ヲ不取シテ返リ、旃檀ノ林ニ入テ枝ヲ不折シテ出テナハ、後悔如何セム。<sup>(7)</sup>

これは、義山が『和語燈日講私記』で指摘する通り、本書の次の箇所を思わせる。<sup>(8)</sup>

譬如入梅檀林、不攀一枝、陟崑崙山、不取片玉。(四頁)



無論、これだけでは本書が出典であるかどうか明確にしがたいが、この箇所がより古い典拠をもたないと思われるところから、源空が本書に拠ったことは十分に考えられる。『長西録』に本書の名が見えるところからすれば、源空が本書を見ていた可能性は大きい<sup>(9)</sup>。

なお、他に、親鸞との関係では、上杉文秀氏が、本書第十における『大集経』の取意の文(五六頁。『大集経』には明白な該当箇所はない)が、『現世利益和讃』の次の箇所と関連があるのではないかと指摘している<sup>(10)</sup>。

南無阿弥陀仏をとふれば、他化自在の大魔王、釈迦牟尼仏のみまへにて、まもらむとこそちかひしか<sup>(11)</sup>。

これもまた確定的なものではないが、ともあれ源空教団において本書が用いられていたと推定することは十分に可能であろう。

さらに、恵全等に収録された中古天台の浄土教関係の文献との関連は当然大きいものであるが、明白な字句の類似箇所としては『妙行心要集』巻下末・法性現前の箇所が挙げられる。この点については別稿に指摘したので、ここでは略したい。後にも見るように、『妙行心要集』の方が成立が遅れると思われるから、この箇所も『略要集』を下敷にして書かれたものではないかと考えられる。

## 2、諸本

以上、古い時代における本書の伝来の様子を採ってみた。続いて本書の現存する諸本について考えてみよう<sup>(13)</sup>。

本書については江戸時代の版本が三種類ある。即ち、寛永三年(一六二六)本、無刊記本、寛文十一年(一六七二)本である。以下、これら三本の特徴を見てみよう。

①寛永本（甲本）

本書は現在大谷大学図書館、叡山文庫等に蔵されている。序一丁、本文四十九丁からなる一冊本で、奥書に

余時寛永丙寅曆 林鍾吉辰 開版

とある。本文は一丁の片面が二〇字×一〇行で、白文である。管見に触れたものでは、大谷大学蔵本は、表紙に「観心略要集寛永木活」とあり、途中まで加点されている。叡山文庫所蔵本のうち、天海蔵のものは表紙に「観心略要集」とのみあり、全巻加点されている。又、生源寺蔵本は表紙には記載がなく、全巻加点されている上に、引用箇所には出典が注記され、卷末に「経論釈俗文都五十三也」とあり、又、最後に『法苑珠林』鬚髮部より『清信士度人経』の文を書き入れてある。今回は大谷大学所蔵本を校訂に用いた。

内容に関し、特に寛文本と較べると、以下のような特徴がある。

(1) 寛文本で、題号、撰号の後に序文があり、そのまま本文に続くが、寛永本では、まず、「観心略要集」とあって直ちに序文にはいり、続いて丁を改めて

観心略要集 天台沙門源信撰

と題号・撰号を記して本文にはいる。丁づけは本文からはじまっており、序の一丁は別になっている。又、撰号も寛文本に「源信述」とあるのと相違する。

(2) 寛文本で割注になっている箇所が、本版では多く本文の扱いになっている。即ち、以下のような箇所である。

○ 観心経曰……生死之罪云云（一三頁）

○弘決云寂靜門……為寂靜門（三二頁）

○弘決云此中所計……妄計假名（同）

○一心三諦……二趣惟同（三五～三六頁）

○成仏有六即位……貧女譬意也（三六頁）

○前後所明……念仏三昧（三九頁）

○具如上引……可知之（四五頁）

○三宝亦有……由一体耳（同）

○四縁者……知識耳（四六頁）

これらがもともといずれの形態であつたか明らかでないが、いずれも注釈的な文であり、その点から考えて寛文本の形態の方が適切なように思われる。又、逆に、寛文本で本文になっているものが本版では割注になっている箇所が一箇所ある。

○且除細念生滅（二頁）

二本が合致して割注とするのは次の二箇所のみである。

○以石毒……下出之（一六頁）

○安樂行者、法華経行也（一七頁）

(3) 思想内容にかかわる程大きな相違はないが、細部の字句の相違は少なくない。全体に、寛文本と較べて本版の方が誤字が多く、又、語順等にも問題のある箇所が多い。枚挙する暇はないが、数字に亘る相違として、寛文本に存す

る次の二箇所が寛永本には欠けている。

○起諸顛倒善不善等（二四頁）

○又措身養命、魚肉辛酒、非時無度（二六頁）

②無刊記本（乙本）

本書は寛永本よりは数多く残っており、筆者は大正大学・立正大学等の蔵本を見た。寛永本と同じく一丁の片面が二〇字×一〇行で四十九丁よりなるが、序文から通して丁づけされているので、実質は寛永本より一丁少ないことになる。本文には返点・送り仮名が付されている。刊記はなく、何時の刊行が不明である。今回は大正大学所蔵の一本を校訂に用いた。

内容の面から見ても寛永本に近く、序文の後に題号・撰号があつて、その後本文にはいつている。但し、寛永本では序文のはじめに「觀心略要集」とのみあつたが、本版では「觀心略要集序」となつている。割注に関しては寛永本と全く同じである。字句に関しては、寛永本に近いが、一部改めてあり、寛文本に近づいている。従つて、本書を寛永本の修訂版と見る従来の説は認めてよいと思われ<sup>14</sup>る。しかし、一部には寛永本と寛文本が一致し、無刊記本のみが異っている場合もある。特に、次のような箇所は注目される。

○〔寛永本・寛文本〕態度難化之有情、垂応於十方、飽施隨類之利生。（二二頁）

〔無刊記本〕垂応於十方、飽施隨類之利生道、態度難化之有情。

○〔寛永本・寛文本〕若於種類、若於相對、凡厥方法、納心觀之、六通四生、併皆清淨（四七頁）。

〔無刊記本〕若於厥万法、納心觀之、六道四生、併皆種類、若於相對、凡清淨。

いずれも本版のみ語順が異なっており、これでは意味が通らない。錯簡と考えるべきである。こうした点から見ても、本版は必ずしもテキストとしてよいものとは言えない。

### ③寛 文 本

本版は最も普及しているもので、又、善本として恵全等の底本に用いられている。今回は東京大学印度哲学研究室所蔵本を底本とした。管見に触れた範囲では、本版には一冊本、二冊本、四冊本の三種類がある。但し、いずれも通して丁づけされており、一三二丁よりなる。表紙には単に「觀心略要集」とあるものの他、「首書觀心略要集」「頭書觀心略要集」等とあるものもあり、呼称は一定しない。頭書とか首書とか言われる通り、詳しい頭注が付されており、これは明治以前の唯一の注釈として貴重であると同時に、典拠を詳しく指摘している点でも現在に到るまで価値は大きい。又、本文が一二六丁で終わった後に校注者の跋文があり、その後さらに三丁半にわたって校勘記が付され、最後に「寛文十一年九月穀旦 長谷川市郎兵衛刊刻」と刊記がある。校注者の名前は不明である。

本版の本文については、跋文に

世に榮行する所の略要集は文は添脱多く、字は錯誤あり、義理は曉らめ難し。(中略) 旧本を求索し、屢対校を加え、兼ねて経籍を考え、自ら翰墨を事とす(六五頁)

と述べている通り、従前の二本に較べて遥かに整理されていて読み易い。又、巻末の校勘記、及び頭注にも他本との校異が記され、学的な手続きが踏まれている。しかし、跋文からもうかがわれるように、校注者の判断で改めている

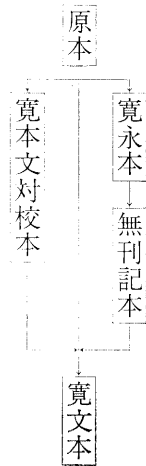
箇所も多いと思われ、必ずしも古い写本の形をそのまま伝えていくという訳ではないようである。

先の二本と較べた本版の特徴については、既に述べたところから明らかと思われるが、冒頭に題号・撰号を出し、序文のあと直ちに本文にいつている点、撰号が「源信述」となっている点、又、割注の箇所が先の二本と異なっている点、等が注目される。

ところで、本版の校勘記は、現存はしないが当時はなお存していたと思われる古い写本の形態を知ることができるといふ点でも貴重である。但し、「一(本)に……と作す」等とある為、一体、何種類のどのような写本を用いたのかは明らかでない。ただ、例えば、最初の「源信述」の箇所には、「一本に源等の三字なし、有る本に述を撰を作す」とあるところから知られるように、少くとも二本以上を用いていることは明らかである。なお、校注のうちには、本版とは異なるが、寛永本・無刊記本と一致するところも多いが、寛永本、無刊記本との相違がすべて挙げられている訳ではない。又、巻末の校勘記の他に、頭注や傍注にも校注に属するものがあり、そのうちには巻末の校勘記と一致するものもあるが巻末に記されていないものもいくらかあり、これらの注の形式がどのように使い分けられているのか明らかでない。

以上のような訳で、対校本の性質は必ずしも明らかでないが、ひとつの傾向として、引用の際、本版の本文(及び寛永本・無刊記本<sup>15)</sup>)では「曰」を用いているところで、対校本の一本が多く「云」を用いている点が指摘される。

以上、本書の現存する三種の版本と、寛永本の対校本の特徴を考察してみた。これら諸本の系統を大まかに図示すると次のようになるう。



付・注釈と研究

上記の通り、明治以前における本書の注釈書としては寛文本の頭注が唯一である。これは、先に述べたように語句の説明、特に典故に詳しく、現在に到るまで価値を失わない。

明治以後のものとしては、上秀文秀氏の『観心略要集講録』（二冊、大正一二年、大谷大学内安居事務所刊）がこられた唯一の纏まったものである。これは真宗教学の立場に立って、思想内容に立ち入った研究・解説が為されている点で優れたものである。安居の講録である為、一般に入手し難いのが残念である。

近年のものとしては、佐藤哲英氏の『観心略要集』（昭和三七年）がある。これも安居の講本で、本文と解説からなる小冊子であるが、本文頭注に引用箇所の出典を大正蔵經の頁数で挙げてある点が便利である。但し、完全に網羅されておらず、又、数字に誤りの多いのが残念である。

研究論文や他の著作において本書に論及したものは少なくないが、近年、本書の撰者をめぐって論争が行われている。これについては次節に考察する。

なお、上杉氏や佐藤氏の著述にも寛文本に拠った本文がはいっているが、テキストのみの刊行としては、恵全第一

卷、仏全旧三二卷・新三九卷等がある。恵全所収のものは、寛文本を底本とし、寛永本と対校し、又、寛文本の校注を記している。但し、遺漏が多く、本文自体にも誤植が少なくない点が残念である。

## 二、撰者

前述のように、『長西録』一本では本書を撰者不明とするが、その後の記録はすべて本書を源信撰として扱っている。ただ、江戸時代に懐音の『諸家念仏集』に「或るひと云く、観心略要は源信の作にはあらず、是れ後人の偽書なり」と。予、未だ真偽を決せず」と偽撰説のあったことを伝えている。<sup>(16)</sup>但し、それが誰の説で、どのような根拠によるものか不明である。明治以後は特に撰者について疑義も出されないまま過ぎてきたが、近年になって、田村芳朗、奈良弘元両氏が異なった論拠から本書の偽撰説を出すに到った。

まず、田村芳朗氏は次のような根拠から源信撰を疑う。<sup>(17)</sup>

(1) 本書の名前が『東城伝燈録』に見えず、又、『長西録』一本に失名とする。さらに、懐音が偽撰説のあったことを伝えている。

(2) 思想内容から見て、『往生要集』よりも一段と飛躍的に天台本覚思想のなかへ溶融された念仏である。具体的には、

イ 阿弥陀三諦説が見え(五頁)、三身、三宝・三徳・三般若に数法相配積している(五八頁)。

ロ 「我身即弥陀」「婆婆即極染」の如き相即思想が見え(一六頁)、又、己心仏、己心浄土が説かれる(同)。



ハ 「帰命本覚心法身」云々と『蓮華三昧経』の偈を引用している（一九頁）。

ニ 「本覚真如」と連ねて用いる語法が見える（同）。

以上の如き諸点から、氏は本書の成立を平安末期（一一五〇）から鎌倉初期（一二〇〇）頃と見、天台本覚思想の第二次形態に属するものとしている。

次に、奈良弘元氏は次の点から本書の源信撰を疑う。

(3) 本書は「源信述」となっているが、このような撰号は他に『真如観』『妙行心要集』『法華弁体』に見えるのみで、これらはいずれも疑わしいものである。又、序文末尾に撰述年時として「強圜之載」とあるが、このように曖昧な表記は他に例を見ない。

以上の偽撰説に対し、最も詳細に反論を展開しているのは花野充昭氏である。氏の反論は以下のようなものである。<sup>(19)</sup>  
(1) 『東域伝灯録』には源信撰として『大乘対俱舍抄』『往生要集』『阿弥陀経略記』『一乗要決』の四書を載せるのみであり、これらのみを真撰とするのは狭すぎる。又、『長西録』一本の記載や懐音の記述もそれをもって偽撰説の根拠とするのは強引すぎる。

(2) 思想内容に関しては、

イ 阿弥陀三諦説に関しては、『往生要集』に阿弥陀仏の仏身に三身、三諦を觀する三身一体説が見え、<sup>(20)</sup>『阿弥陀経略記』には「無量寿」の三字を空・仮・中にあてはめる無量寿三諦説が見える。<sup>(21)</sup>さらに、源信撰の可能性の高い『正修観記』にも阿弥陀三諦説が見える。<sup>(22)</sup> 教法相配積は古くから密教にあったもので、源信にあったとしても不思議はない。

ロ 『往生要集』にも「生死即涅槃、煩惱即菩提」と見え、源信に相即思想があったと見てよい。<sup>(23)</sup>

ハ 『蓮華三昧経』の偈は既に安然が数多く引用しており、<sup>(24)</sup>源信にその引用があっても不思議はない。

ニ この点に関しても、思想的に源信にありうるものである。

(3) 奈良氏の説もそれをもって偽撰説の根拠とするには弱過ぎる。「源信撰」とあっても疑わしいものがある。又、『観心略要集』の一本には「源信撰」とあり、外形面だけでは決められない。

以上が花野氏の反論の概略であるが、要するにいずれの根拠も偽撰説を積極的に主張するには弱過ぎるということである。このことはひとまずは承認しうるように思われる。<sup>(25)</sup>では、逆に源信撰の積極的な根拠があるかという点、花野氏自身、「積極的に論証できない」ことを認めている。

そこで、他の真撰説をとる論者の説を見ると、平了照氏は『往生要集』と比較して、

(1) 共に十門の構成で、かつ経論の要文を類聚したものである。

(2) 文体文勢は両書全く同一で、一人の作であることは疑いえない。

(3) 『往生要集』の序には「予が如き頑魯の者」と言ひ、<sup>(26)</sup>『観心略要集』にも「予が如き愚暗の者」とあり(二頁)、<sup>(27)</sup>似ている。

等の点を本書の源信真撰の根拠としている。しかし、(1)、(3)については、本書が源信以外の作であっても、『要集』の影響下に書かれたとすれば可能なことであるし、(2)については、本書の方が『要集』よりも遙かに美文調で、かつ外典の故事を多く引く点などを考えると、「文体文勢は両書全く同一」とは言えない。

他にも佐藤哲英氏、石田瑞麿氏、坂東性純氏等が真撰説をとっているが、<sup>(28)</sup>特に積極的な真撰の根拠を出している訳

ではない。

以上の点を考えるならば、真撰説もまた必ずしも積極的な根拠はなく、ただ、本書の思想が必ずしも『要集』と矛盾しないこと、又、積極的な偽撰の根拠がない以上、伝承的な真撰説をあえて否定すべきでない、という甚だ消極的なところに落着くことになる。

なお、真偽の問題と並んで、真撰説の中では、本書の「強圉之載」を何時にあててからで説が分かれている。即ち、「強圉」は『爾雅』積天に「太歳、丁に在るを強圉と曰う」とあるところから、「丁」の年を指すことが明らかである。本書が内容的に見て『往生要集』より進展していることから、その成立を『要集』より遅れるとすることは定説となっているが、『要集』撰述は源信四十三歳の永観二年（九八四）から翌寛和元年（九八五）であるから、その後、源信の死に到るまでの「丁」の年を見ると以下の通りである。

永延元年（丁亥）  
九八七（西暦） 四六歳（源信）

長徳三年（丁酉）  
九九七 五六歳

寛弘四年（丁未）  
一〇〇七 六六歳

寛仁元年（丁巳）  
一九一七 七六歳

このいずれに本書の撰述をあてるかで意見が分れている。即ち、平丁照氏は永延四年、石田瑞麿氏は長徳三年又は寛弘四年、上杉文秀氏、花野充昭氏、坂東性純氏は寛仁元年とし、佐藤哲英氏はいずれとも確定して<sup>29)</sup>いない。しかしいずれの説も論拠は十分でない。

以上が本書の撰者、撰述時期に関する従来の諸説である。それに対し、筆者はかつて新しい観点から本書の源信撰

を疑ったことがあった。<sup>(30)</sup> 即ち、それは本書第十に引かれる雄俊の伝（五八―五九頁）に関するもので、従来出典が確認されなかったこの伝が、塚本善隆氏が紹介している真福寺藏偽撰戒珠『往生浄土伝』の記述と極めて近いことを指摘した。そして、この偽撰戒珠伝が十二世紀後半に日本で成立したとする塚本氏の説にもとづいて、本書の成立もかなり引下げるべきではないかと論じたのである。その詳細は別稿（注30の論文）を参照して頂きたいが、<sup>(31)</sup> それに対し、畏友花野充昭氏より、偽撰戒珠伝の雄俊伝末尾に『梁記』に拠って書いたとの記述があるところから、『略要集』も直接『梁記』に拠ったとすれば、その成立も遡らせてもよいのではないかと疑問が呈された。<sup>(32)</sup> 筆者は最初その可能性に否定的であったが、その後、その可能性も全く否定しきれないと考えるようになった。というのは、類例の例が他にあることを知ったからである。即ち、それは阿弥陀魚説話の場合で、山内洋一郎氏がとりあげている。<sup>(33)</sup> そこで、氏の説を紹介しておこう。この話は「南無阿弥陀仏」と唱えることにより魚が捕えられたという話であるが、『三宝感応要略録』、偽撰戒珠伝に見え、『今昔物語』、『法華百座聞書抄』にとりあげられている。ところが、それに先立つ『和泉式部集』に「あみだ仏といふにも魚はすくはれぬこやたすくとはたとひなるらん」とあり、この話を前提としているように見える。和泉式部は十一世紀はじめ頃活動しており、『三宝要略』は非濁（一〇六三役）の晩年の著述と考えられているから、和泉式部はこの話を別のルートで、例えば『三宝要略』が典拠としている『外国記』（逸書）等が早く日本に伝わり、それに拠ったのではないかと考えられるのである。この推定が認められるとすれば、『略要集』の雄俊伝についても同様のことがあり得ると考えられる。とすれば、雄俊伝は必ずしも本書の成立を決定する根拠とはなり得ないことになる。

さらに、本書の成立を余り遅く見ることのできない根拠は他にもある。それは『妙行心要集』の成立に関するもの

である。『妙行心要集』は『略要集』より進んだ思想を多く含み、『略要集』以後の成立と考えられるが、西教寺及び金沢文庫所蔵の写本奥書によると、それらの原本は寛治六年（一〇九二）の書写本である。西教寺本については佐藤哲英氏が紹介しておられるが、筆者は別稿において金沢文庫本を紹介、その奥書がかなり信頼できそうであることを論じた。<sup>37)</sup>もしそうであるならば、『略要集』もその頃までには成立していたと考えなければならないことになる。

このような訳で、本書の成立を極端に遅く見ることは困難になる。では、逆に本書を源信自身のものと認めてよいかと言うと、やはり筆者は躊躇を覚える。思想内容については水掛論になるからさっておき、その文章をとつてみても、本稿の注解で気付いた箇所を指摘しておいたように、極めて和臭の強い漢文で、また外典の故事などを多く引く美文調の文章である。現在の筆者には完全に証明することはできないが、これは源信の真撰書といささか様子が異なっているように感ぜられる。詳細はなお今後の研究に委ねることとして、ここではひとまず、本書の成立を源信以後、十一世紀と考えることにしたい。

### 三、引用書

前述のように、本書における引用に関しては、寛文版頭注や上杉文秀氏の『講録』に詳しく指摘されており、主なものに関しては、佐藤哲英氏が大正蔵の対応箇所を指摘している。筆者もまたそれらを参考としてできる限り検索し、大正蔵で対応箇所を調べてみた。それらは注解篇において指摘し、本稿末の引用書索引に書名別に整理し、さらに本項末に一覧表を作つて纏めてみた。今、その結果にもとづき、本書における引用の特徴を考えてみたい。

まず、引用の回数であるが、上杉氏は五五部一五一文とし、佐藤氏は六五部一七九文とする。<sup>(38)</sup> 上杉氏の場合、「…曰(二云)」と書名が明示されているものだけ数えたようであり、佐藤氏の場合、他の文における引用・言及も一部含んでいる。筆者の調査では、別表の通り、引用が明示されているもの一六一文、他の文中の引用・言及二〇〇文、計三六一文という結果を得た。引用書の部数は総計九〇部、引用が明示されているもの六二部となる。こうした数字の相異は多分に採録の基準によるものであり、特に、他の文中の引用・言及は、二、三字の語句や慣用的な言い回しにまで典拠を見るかどうか等でかなり数字が変わってくる為、あくまで一応の目安という以上の意味はもち得ない。又、引用が明示されているものの場合でも、基準のとり方によって多少の増減はやむを得ない。筆者の場合、次のような基準に拠った。

(1) 四七—3<sup>(39)</sup> (大乘止観) のように指摘された文献に該当箇所がなく、他のもの(この場合、維摩経)にあるものは、後者で採った。

(2) 「釈尊勸曰」(五—7)、「弥陀自曰」(五—8) のように經典名が明示されていなくても、引用とはっきりわかるものは採った。

(3) 「先徳云」(六三—5)、「或書云」(五一—1) のように、不明のもの、或いは書物を特定しえないものは独立に一部とした。

以下、引用を明示したものを中心に考察することにした。

引用が明示されているものの内訳は以下の通りである。

經

二三部 五五回

論 九部 一三回

中国撰述書 一七部 七八回

その他 六部 八回

外典 七部 七回

計 六二部一六一回

\* 大正藏未収内典（蓮華三昧經）、佚書（惟無三昧經・玄枢）、未檢（般若經・太子偈・先徳）。

\*\* 未檢若しくは書物を特定できないもの（或書・古人諺）を含む。

本書の引用態度を見ると、以下のような特徴が指摘される。

(1) 形式的な特徴として、引用の際、多少の例外を除いて、<sup>40)</sup> 経典には「曰」、その他の場合は「云」を用いる。又、引用の最後は「云云」で結ぶ。このように統一された形式は恵全を見渡してみても他に見られない。源信の真撰と思われる著述においては、引用の際は経典をも含めて「云」を使うことが多く、文末の表示もない場合も多く一定しない。但し、本書の場合も果して最初からこのような形式をとっていたかどうか疑問である。確かに現存する三本はいずれもこのようになっていたが、先に指摘した通り、寛文本校注の一本では経典引用の際も「云」になっている箇所が多く、又、『三帖抄』所引のものでは、経の引用に「云」を用い、かつ、文末は「云云」のかわりに「矣」で結んでいる。

(2) 内容の面から見ると、比較的正確に引用しているものが多いが、中には問題となる箇所もいくつかある。

(イ) 書名を表示していないもの——経曰（二—二他）、釈迦勸曰（五—七）、弥陀自曰（五—八）、普賢十願云（二

六—12)、天台云(六一—7)、妙樂大師云(二二—5)、孔丘云(三五—11)、或処云(五一—8)等。

(四) 該当箇所が現存書に見えないもの。

撰論(八一—7)——無性『撰論釈』に出る。

大乘止観(四七—3)——『維摩經』に出る。

平等覺經(六一—10)——迦才『浄土論』に出る。

(ハ) 極端な取意ではつきりと該当箇所を指摘し難いもの——大集經(五六—10)、迦才『浄土論』(六一—9)。

(3) 引用回数が多いものを挙げていくと以下の通り。

二五回——摩訶止観

一九回——止観輔行

一一回——六十華嚴

七回——心地観經

五回——法華文句

四回——法華經・維摩經・金錫論

三回——宝積經・觀無量壽經・涅槃經・正法念処經・法華玄義・法華文句記・西方要決

このように、『摩訶止観』及び『輔行』が群を抜いている。しかも、第三位の『六十華嚴』は第九章に、第四位の『心観經』が第八章に集中しているのに較べて、『止観』と『輔行』は各章にわたって広く用いられているのが特徴である。即ち、『止観』は三、四章、『輔行』は三、四、八章を除いてすべての章で引かれている。特に、四〇—8は



『止観』巻上の菩提心の項の殆ど全文を引く長い引用になっている。こうした『止観』と『輔行』の極端な多用は、本書の観心中心主義を考えれば当然のことと言えよう。

なお、『止観』『輔行』に限らず、智顛と湛然の著述全体を合せると、さらに大きな数になる。

智顛(36回)——法華玄義・法華文句・観音玄義・維摩経略疏・摩訶止観

湛然(32回)——玄義釈籤・文句記・止観輔行・止観義例・止観大意・金錚論

両者を合せると全引用回数四〇パーセントを越えることになる。既に上杉氏や佐藤氏によって指摘されていることであるが、このような天台文献の多用は、浄土教関係の文献を引用することが少ないのと好対照をなす。即ち、浄土教関係のものは以下の四部九回に過ぎない。

観無量寿経(3回)、安樂集(1回)、迦才浄土論(2回)。うち1回は『平等覚経』として引く、西方要決(3回)(4) 引用に関して、次に注目されるのは『往生要集』との関係である。『要集』は直接明示しての引用は一回もないが、『要集』と本書で重複して引かれているものは、筆者が気づいただけで二二回にのぼる。即ち、以下の通り。

五—8、八—8、一三—4、一五—11、二五—1、4、二七—3、8、二八—11、二九—9、三〇—7、三一—4、三八—12、三九—5、8、四八—7、10、五八—5、六一—4、10、六二—11

注目すべきは、これらのうち、多くの箇所において本書の引用の形が現行の経論と相違する場合、『要集』所引のものとは本書の形が一致することである。特に、前記のうち、ゴチックで記したものは、本書所引の形は極端な取意や合糝・中略等が行なわれており、大幅に現行経論と相違するのであるが、『要素』と本書ではほぼ一致した形で引かれている。

評細は注解篇について見られたいが、試みに一箇所だけ例として挙げておこう。二九―九における『瑜伽論』の引用の場合をとりあげてみる。

『瑜伽論』<sup>(41)</sup> 卷四 『要集』<sup>(42)</sup> 『略要集』

彼有情、口或如針、口 口如針孔、腹如大山、

或如炬、或復頸癭、其 縱逢飲食、無由噉之。

腹寬大。由此因緣、縱

得飲食、無他障疑、自

然不能若噉若飲。

これは一例であるが、このような『要集』と本書の一致は偶然の一致ということでは考えられない。本書が源信の著述とすれば、こうした一致も当然であるが、もし本書が源信自身のものでないとすれば、著しく『要集』の影響下に作られたものと考えられる。

なお、上述の中からもう一箇所興味深い例を挙げておけば、先にも触れた六一―10の『平等覚経』の三尊呼喚の文である。これは『平等覚経』にはなく、迦才の『浄土論』卷下に出るのが初見のようである。<sup>(43)</sup>ところが『要集』には『無量清浄覚経』(『平等覚経』に同じ)のものとして引いている。<sup>(44)</sup>恐らく、『浄土論』の少し前に「無量清浄覚経及無量寿経二処皆云」とあり、その後、「又」としてこの文が出る為、『清浄覚経』からの引用と誤解して孫引きし、それをそのまま本書でも引き写したのである。なお、この文はまた、親鸞の『正像末和讃』にも「弥陀観音大勢至、大願の船に乗じてぞ、生死の海にうかびつつ、衆情をよばふてのせたまふ」として用いられている。<sup>(45)</sup>

(5) 次に外典の引用を見てみよう。外典からの引用は前述のように七部七回であるが、うち、五〇―12の「古人諺」と五一―1の「或書」は未だはつきりしない。後者は寛文本頭注に『史記』とするが、未だ検索し得ていない。それを除くと、孔子家語(三五―11)、顔氏家訓(五〇―11)、論語(五一―3)、文選(五二―8)、史記(六五―2)が挙げられる。これらのうち、『論語』『史記』は古典的な経書・史書であるが、他の三書はいずれも六朝の文学である。しかも、『論語』『史記』の引用も含めて、いずれも深い思想内容に関わるものではなく、格言や故事を引いているに過ぎない。こうした点を考えると、本書の著者は必ずしも中国の正統的な経学をしっかりと学んだ者とは言えず、当時の貴族の一般的な素養や常識の範囲に過ぎないように思われる。しかし、たとえそうとしても、内典に限らず、こうした外典をも引いているところから考えて、作者は世俗的な素養をもっていることは確かであり、又、本書はそうした世俗社会にも読者を予想して書かれたのではないかと思われる。

以上、引用を明記したものについてやや詳しく考察してみた。次に、地の文の中での引用や典拠のある文句について考えてみたい。これについても数を調べてみると以下の通りである。

経	二四部	五七回
論	四部	九回
中国・日本撰述書	一六部	一一〇回
その他	二部	二回
外典	九部	二二回
計	五五部	二〇〇回

但し、前述のように、基準のとり方でかなり数の増減があるので、あくまで一つの目安に過ぎない。ともあれ、このように多数の引用又は典拠ある語句が他の文中にちりばめられているということ、逆に言えば、そうした文句をつづり合せて本文を構成しているということが本書のひとつの大きな特徴である。それらの引用は必ずしもすべて思想展開上に必要なものばかりではなく、修辭的なものも少なくない。その為に、本書は論理的に構成されているというよりも、多分に情緒に訴える美文調のものとなっている。

次に、回数が多いものを挙げてゆくと、

摩訶止観(三七回)、往生要集(二九回)、法華經(一八回)、止観輔行(二四回)、法華玄義(八回)

の順になる。『止観』と『輔行』が多いことは、明記された引用の場合から見ても当然と言えるが、他に『往生要集』と『法華經』がかなりの数になることが注目される。後者について言えば、「諸仏之秘要」(一一三)、「聚落田里」(三一四)等、ごく短いありふれたような言葉でも『法華經』からとって来ており、当然のことながら、『法華經』は著者も読者も熟知していることが前提になっている。

さて、問題になるのは『往生要集』であるが、それが最も多く用いられているのは第三章である。第三章は「極樂の依正の徳を歎ず」と題され、本書の中でも最も有相的な立場から浄土を描出するのであるから、『要集』との関係も当然と言えるが、興味深いことにこの章には『摩訶止観』をはじめとする智顛や湛然の著述が明白な引用としては一度もなく、地の文中における使用も極めて少ない。逆に、無相的な出離生死觀を説く第七章には『止観』や『輔行』を多く用い、『要集』と重複するところは全くない。即ち、本書は有相的な事觀については『要集』に拠り、無相的な事觀については『止観』等の天台の論書に拠っており、両者を接合するところにその体系が成り立っていると

言うことができよう。

他に此の文中での引用で注目すべきものとしては、第一に、浄土教関係の文献が一、二追加される。即ち、『無量寿経』が用いられているのは当然であるが、世親の『往生論』も、本書第三章の最初は明らかにそれに拠っている(八―12)。他に善導の『往生礼讚』が挙げられるが(五二―10)、これは必ずしもはっきりした引用ではない。

次に、外典に關してであるが、『論語』『文選』『白氏文集』『蒙求』等に典拠が求められる。『論語』を除けば俗文学的なものであり、古典に典拠を求めるといよりは、当時人口に膾炙していた故事や名文句を適宜用いたものと言えよう。既に述べたように、こうしたことは本書が俗世間、特に貴族社会に読者を予想していたと推定される根拠となるらう。

本書が『往生要集』と關係深いことは既に述べたが、最後に、『要集』における引用書を本書の場合と簡単に比較して見ておこう。『要集』に關しては、周知の通り、花山信勝氏の詳細な調査がある。<sup>(46)</sup> それに拠ると、引用された書物一六〇部、引文六五四回、引文中引文四三回、所依乃至言及二五五回、計九五二回にのぼる。<sup>(47)</sup> 花山氏の調査は書名があがっているものについてであり、他の文中に特別の指示なしに埋め込まれたものは採っていないようであるから単純に比較はできないが、ただ、『要集』は引文集的な性格が強い為、地の文中に多くの引用をはめ込んでゆく本書とは根本的に性格が異なっているように思われる。『要集』で引用回数が多いものは、『觀仏三昧経』(58回)、『大智度論』(46回)、『大毘婆沙論』(43回)、『觀無量寿経』(40回)等が挙げられる。その特徴として、『觀仏三昧経』『觀無量寿経』等、事觀的要素の強い經典が多く用いられていることが指摘できる。又、『釈浄土群疑論』(33回)、『西方要決』(18回)、『安樂集』(15回)、『往生礼讚』(13回)等、浄土教關係の典籍が多いのは当然であるが、他方、天台



書名	序	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計	備考
仏説仁王般若波羅蜜經						1						1 (1)	仁王經
大乘理趣六波羅蜜多經							(1)					(1)	
妙法蓮華經	(1)	(2)		(1)	(1)		(1)	(1)				4 (18)	經、藥王品
無量義經							(2)	(5)				(1)	
仏説觀普賢菩薩行法經								(1)	2 (1)			2 (2)	普賢觀經
大方広仏華嚴經 (60卷)			1							7 (1)	2	11 (1)	華嚴經
同 (80卷)				1 (1)						1		1 (1)	普賢十願
同 (40卷)							1					1	普賢十願
大宝積經							2			1		3	寶積經
仏説無量壽經										(1)	(2)	(3)	寶積經
仏説觀無量壽經				1 (1)							(2)	3 (3)	觀無量壽經、 勸曰、 積尊
称讚浄土仏授受經				(1)								(2)	
大般涅槃經					1 (1)							3 (6)	涅槃經、大經、 釈
摩訶摩耶經													
菩薩從兜率天降神母胎説 広普經					(1)							1	菩薩処胎經

書名	序	計	備考
大方等大集經 大乘大集地藏十輪經 (仏説) 般舟三昧經 維摩詰所説經 仏説首楞嚴三昧經 仏説觀仏三昧經 仏藏經 正法念処經 仏説罪業応報教化地獄經 仏説未曾有經 大方広円覚修多羅了義經 請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪經 菩薩瓔珞本業經	1 (1) 4 (2) 4 (5) 4 (3) 4 (2) 8 (9) 1 (8) 8 (4) 11 (7) 10 (14)	2 (1) 2 (1) 1 (1) 4 (2) 1 (1) 1 (1) 3 (2) 1 1 (1) 1 (1)	大集經 彌陀自白 淨名經、大乘止觀 觀仏經 正法念処經 罪業応報經 未曾有經 円覚經
計 (35部)	1 (1) (2) 4 (2) 4 (5) 4 (3) 4 (2) 8 (9) 1 (8) 8 (4) 11 (7) 10 (14)	55 (57)	112



妙法蓮經玄義 (中国・日本撰述書)		計 (10部)	龍樹菩薩為禪陀迦王說要 大乘起信論 三藐三菩提心論 金剛頂瑜伽中發阿耨多羅 究竟一乘宝性論 撰大乘論積 成唯識論 瑜伽師地論 中論 無量壽經優波提舍 大智度論 (論)										書名			
		1														序
(1)		3 (1)	1 (1)			1	1									I
		1 (1)								1						III
		(2)	(1)													IV
1		1 (1)			1											V
(1)		3 (3)	2 (2)							1						VI
		1			1											VII
		2 (1)								1						VIII
1		1			1											IX
(4)																X
3 (8)		13 (9)	2 (3)	1 (1)	2	1	1	1	1	1	2		2 (1)	2 (4)		計
法華玄		22	龍樹	起信論	菩提心論		撰論	唯識論	瑜伽論					大論		備考

書名	序	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計	備考
法華玄義積籤			1 (2)					1 (1)		1		2 (3)	積籤
妙法蓮華經文句				1 (1)				2 (2)		1 (2)	3	5 (5)	法華疏、疏藥王品疏
法華文句記						1				1 (1)		3 (2)	妙樂大師、文句記
觀音玄義				1 (1)								1 (1)	觀音玄
維摩經略疏											2 (2)	2 (2)	淨名疏、天台
金光明文句									1 (1)			1 (1)	
大毘盧遮那成仏經疏								1 (1)				1 (1)	
摩訶止觀												25 (37)	止觀、大師積
止觀輔行伝弘決												19 (14)	弘決
止觀義例												2	義例
止觀大意												2	妙樂大師
大乘止觀法門												2	大乘止觀
金鉉論												4 (1)	
法華三昧懺儀												1	
安樂集												1 (3)	

書名	計 (24部)	往生要集	大唐西城求法高僧傳	付法藏因緣傳	永嘉証道歌	淨土五會念仏略法事儀讚	往生札讚偈	西方要決疑通規	浄土論(迦才)	序
蓮華三昧經 偽撰戒珠往生傳 即身成仏義私記(安然) 惟無三昧經	(2) 4 (10) 7 (9)  (22) 2 (7) 12 (3) 6 (7) 7 (7) 3 (9) 14 (13) 23 (21)	(1)  (2)  (1)  (19)  (1)  (4)  (1)  (1)								I II III IV V VI VII VIII IX X
	78 (110)	(29)	(1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	3 (1)	2	2	計
經(佚書)	188			馬鳴伎声唱	或 処		要決、慈恩	平等覺經		備考

顏氏家訓	孔子家語	文選	史記	山海經	韓非子	莊子	論語	(外典)	計 (8部)	先德	太子堅辭而說偈	般若經	玄樞	書名
						(1)			1					序
						(1)								I
														II
		(2)												III
									2			1		IV
														V
					(1)		(1)							VI
	1								1				1	VII
									(1)					VIII
	1					(1)			1					IX
		1	1				(1)		3	1	1		1	X
		(1)	(2)	(1)	(1)	(3)	(3)		8	1	1	1	2	計
		(3)	(2)	(1)	(1)	(3)	(3)		(2)					
顏氏	孔子								10	(	(	(	(佚書	備考
										)	)	)	)	

書名	序	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	計	備考
白氏文集		(1)			(2)						(1)	(4)	
蒙求											(4)	(4)	
和漢朗詠集					(1)							(1)	
或書										1	1		
古人諺												1	1
計 (13部)	(1)	(1)	(1)	(2)	(3)		(2)	1	(1)	4	2	7	
総計 (90部)	1 (4)	6 (13)	14 (13)	5 (30)	6 (15)	19 (6)	17 (21)	11 (16)	13 (15)	31 (21)	38 (46)	161 (200)	361
													29

(注意)

本表は本稿末の『観心略要集』引用書索引」によって作成したものである。上欄に書名、中欄に各章毎の引用回数、下欄(備考欄)に引用の際に用いられている別称を記した。中欄で各章の上の数字は引用であることが明示されているもの(索引でゴチックで記したもの)、括弧を付した下の数字は地の文中に引用・言及されているものである。索引中に括弧を付した参考項目は含めていない。

四、思 想

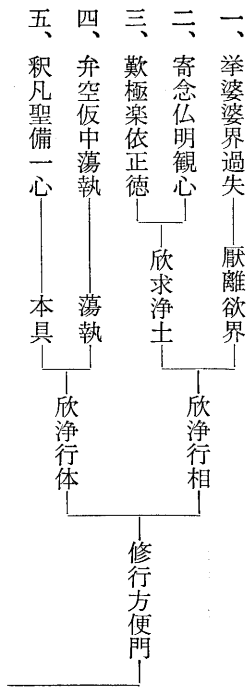
本書序文には、「夫れ観法は諸仏の秘要、衆教の肝心なり」と観法が仏教の根本であることを言う（一頁）。この「観法」は具体的には観心の場合を指すと考えてよい。続いて「故に天台宗にはこれをもって規模と為す」と述べる。即ち、ここに、自らが天台宗の立場に立つこと、天台宗の立場からしても観心が根本であること、それ故、前の文と合せ考えると、この天台宗の立場が即ち仏教の根本となることが知られる。その後、『心地観経』の引証をばさんで、次に「爰に世は澆季に迄りて人は利根なること少し」と時代相を述べる。時代相への反省は「何に矧いけんや予が如き愚暗の者をや」とさらに自己への反省へと深まる。だが、「澆季」における「愚暗の者」だからと言って、手を拱こいていゝる訳にはいかない。ここに本書述作の意図が述べられる。

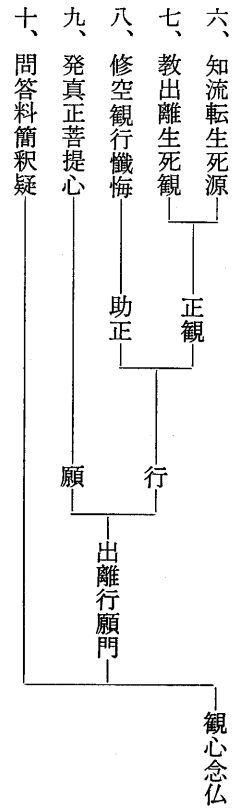
然れども志は弘闡に深く、思いは兼濟に切なり。竊かに大師の観心を慕いて、自他の慧眼を開かむと欲す。仍よて聊いささか祖師の釈文を鈔し、名づけて『観心略要集』と曰う。

ここで明らかなことは、(1)本書が利他的な立場から書かれていること、(2)述作の目的は「大師の観心」を明らかにする点にあること、(3)その方法として、「祖師の釈文を鈔」すること、(4)『観心略要集』と名づけること、である。この名称の「略要」について、寛文本の注では「今、十乘十境の繁広なるを略して、一心三観の枢要を示し、文約にして義豊かならしむ。故に略要と云う」と解し、上杉文秀氏は「観心を明さんが為にその要文を略出し編集せる書なり」と解する。いずれが正しいかにわかに定めえないが、前者の方が適切のように思われる。

さて、ここで問題となるのは、本文は多分に浄土念仏をとり入れておるのに、その旨が序文には全く示されていない点である。序文に従う限り、本書は正統的な「大師の観心」を説く書である。この点を解く鍵は恐らく先に触れた「世は澆季に迄りて人は利根なること少し」という時代意識であろう。このような時代にあつては、大師が説いたままの形で観心を実践することは困難である。そこで浄土念仏を媒介とする方法がたてられてくるのである。しかし、それは決して場当りの便法であつてはならない。必然的にそうであらねばならない。そう考えるならば、「略要」の「要」は寛文本に言うような一心三観のみならず、浄土念仏を媒介とする本書の観心の方法論全体を指すものとも考えられよう。又、実際には独特の説を立てながら、「祖師の釈文を鈔し」と言うのも、本書の説が決して恣意的な独断によるものではなく、「祖師」の意を体したものであるとの自負と受け取ることも許されよう。

さて、本書は全体で十章よりなる。本書は必ずしも論理的に緻密に構成されたものではないから、各章が相互にどのように関連して一つの体系となつておるか、余り明確でない。しかし、恣意的に全く構成なしに並んでおる訳でもない。この点に関し、上杉氏は優れた理解を示し、それにもとづいて佐藤哲英氏が次のような図式に纏めておる。<sup>(51)</sup>





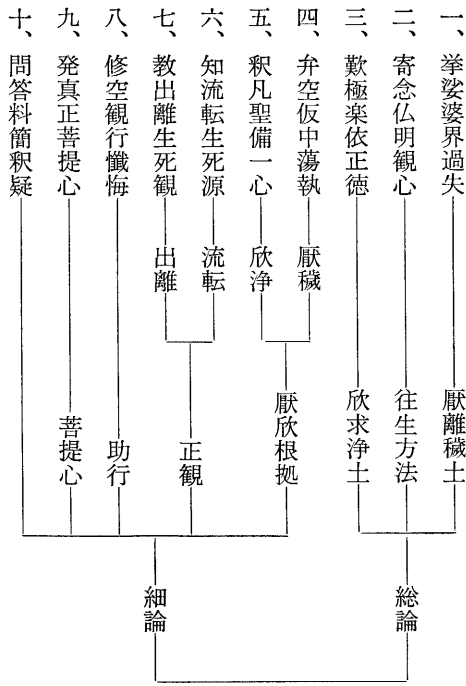
これは甚だ優れた解釈ではあるが、なお疑問は残る。即ち、この解釈によると、前半の浄土念仏を説く一～五章はあくまで修行方便で、中心は後半の六～九章ということになる。これは一応はもつともではあるが、もし先に述べたように、浄土念仏を媒介とする観心が単なる前段階的なものでなく、むしろそこにこそ本書の独自性があると考えることが許されるならば、後半に重点を置く見方が適切かどうか、なお疑問が残ることになる。実際、第二章は第七章と並んで、或いはそれ以上に本書の根幹をなしているように思われる。又、第九章の位置づけにも問題がある。即ち、先の解釈では第九章も出離行願門にはいることになるが、第九章には「極樂に往生する業因は菩提心を根本と為す」と言われており（四〇頁）、明らかに有相的な浄土観を基盤としている。

このように見てくるとき、注目されるのは上杉氏が別の箇所を示しているもう一つの解釈、即ち、「前三章は十章の大意若しくは略釈と見」<sup>(53)</sup>、第四章以下を広説と見る解釈である。上杉氏自身はこの解釈に批判的で、これ以上論じていないが、今、もう少し詳しく考えてみるならば、まず、一～三章で有相的浄土観にもとづく観心という本書の骨格が示される。即ち、第一章が厭離穢土、第三章が欣求浄土で、第二章は往生の方法としての念仏に観心が述べられる。第四章以下は以上の基本構造を詳論する。即ち、まず、第四、五章では厭穢欣浄が可能となる根拠を述べる。第



四章は厭穢で、三諦によって此土の執が払われ、第五章では凡聖が一心に備わるといふ点から欣浄の可能性が述べられる。この二章は、先の第一、三章と関係する。続いて第六、七章では第二章の観心の構造を細説する。即ち、第六章では無始無明が生死に流転する源であることが明らかにされ、第七章ではその無明を対治する観心の方法が述べられる。第八章ではその観心を助ける助行としての懺悔が明らかにされ、第九章では観心の基盤になければならない菩提心を説く。

以上の構造を図示すると次のようになる。



無論、これは一つの試論に過ぎないが、このように解するならば、本書における観心と念仏の緊密な結びつきが理解できるように思われる。

以下、章を追ってさらに詳しく内容を見てゆくことにしよう。

## 1 娑婆界の過失を挙ぐ

この娑婆世界における一切の行為は輪廻に沈む業因となる。それは無始無明に依っているからである。幸いに仏法に遇いながらも娑婆世界で修行することは困難である。浄土に生れると自在に仏道を成就することができるのであるから、往生を願うべきである。

このように、ここでは浄土が修行の場として捉えられている点が注目される。

## 2 念仏に寄せて観心を明す

ここではまず往生の方法として念仏がとりあげられ、そこから阿弥陀三諦説が説かれる。これは、周知のように、阿弥陀の阿に空、弥に仮、陀に中をあてて、名号と三諦の会合をはかるものである。続いて一心三諦の説明に移る。ここでは三つの喩が用いられる。第一は『止観』巻一下に説く鏡・像・明の喩で、鏡が中、像が仮、明が空に喩えられる。第二は『玄義』巻五下の如意珠の喩で、如意珠が中、光明が空、七宝が仮に喩えられる。但し、この喩では修証不二の点が十分に明らかにされないという。第三は『釈籤』巻四の夢の喩で、夢事宛然が仮、夢の求不可得が空、夢の心性が中に喩えられる。

さて、夢の喩の最後で夢に見る諸法が即ち心性に他ならないところから、万法唯心が説かれる。この一心について『華嚴経』等を引証とし、それが自性清浄本覚心であると結論づける。さらに『撰論(釈)』等を引いた上、発心して極楽に往生すべきことを説く。

以上が本章の概略であるが、注目すべき第一の点として、ここでは往生の行業が端的に念仏とされ、しかもその念仏は『要集』のような色相観ではなく、名号である。そして、その名号が観心につながるものとされている。第三章には有相的な浄土観が展開され、白毫観を勧めるような記述も見られるが、必ずしもそれが積極的に勧められている訳ではない。又、第十章でも理観と散心の称名について問題とされているが、有相観については特に問題にされていない。これは『要集』系の浄土念仏と別系統に立つものとして注目される。

第二に、ここでは念仏が二重の役割を持たされているように見える。即ち、一方で、弥陀の誓願による往生の方法であると共に、同時に阿弥陀三諦説を媒介に観心に深められていくものでもある。しかし、この二面は別物ではない。念仏から観心に深まり、その観心自体が往生の行業となるのである。勿論観心によって現世で悟りに達するのであればそれに越したことはないが、それが困難であるから、現世の観心が往生の業となり、浄土でさらに深められて悟りに到るといっているのである。

第三に、一心三諦思想に移ると、幾つかの喩によって展開される三諦思想が、ここでは空・仮・中の範疇の枠を越えて、中の実体化の傾向を帯びているように思われる。鏡の喩では、「鏡は万像の体性なり。之を中道の万法の体性なるに喩う」とする。又、夢の喩では、「中道は即ち是れ空仮の体性なるは、夢に見る所の諸法は即ち心性なるが如し」として万法唯心を導き出す。このように、三諦は対等の位置に立つものではなく、中が空・仮の体性として実体

化されてきているのである。

第四に、中の実体化と関連して、一心が同様に実体化されてきている点も注目される。一体、中は「自性清浄心が凡聖に隔てなく、因果に改まらず、三世に常住にして、二辺に動ぜざる」と定義されるのであるが（五頁）、又、別の箇所では、「只だ自性清浄の本覚心のみありて而も実なり」と言われる（八頁）。即ち、ここで言う一心は、凡夫の汚れた心ではなく、その底にある清浄心であり、それが実体化されて考えられているのである。この心の問題は、さらに第六、七章で元初無明と清浄如来蔵心の関係として展開される。

第五に、こうして一心が実体化されると、「万法唯心」が言われ（七頁）、他方、夢の喩に典型的に見られるように、現実の世界が非現実的な夢のようなものと考えられてくる。この夢から覚めることが悟りに譬えられる訳である。このような考え方は仏教の中では必ずしも新しいものではないが、ここで問題になるのは、夢として否定されるのは、現実における迷いという側面だけなのか、それとも現実の多様性そのものが否定されるのかという点である。当然前者でなければならぬであろうが、夢の譬では後者のように考えられてしまうのではないか。一体、平安時代後期の仏教には、現実を夢と見る思想が強くなっていくが、イデオロギー的に見れば、没落してゆく貴族階級の意識を反映する面もある。

### 3 極楽の依正の徳を歎ず

ここでは世親の『往生論』や『観無量等經』、又、直接には『往生要集』の欣求浄土及び観察門等に依りながら、有相的な浄土の相を描写する。特に白毫に詳しく、白毫觀を勧めるようなところも見られる。全体に対句を多く用い

た美文調で、美的に浄土の相を描き出している。但し、それで終るのではなく、最後に観解を作して、有相の浄土を無相の真理に会している。即ち、「安樂仏土も因縁より生ずる所にして即空・即仮・即中なり」とし、さらに、「極樂は一念三千にして並びに畢竟空、並びに如来藏、並びに実相」と説いている（一四頁）。

#### 4 空仮中を弁じて執を蕩す

以上の三章で、厭穢欣浄の基本構造と念仏<sup>二</sup>観心の基本的方法が述べられた。以下の章では、その基本がさらに深められ、詳論される。まず本章では三諦を観ずることにより、此土の執を遣ることが述べられる。この点で第一章と関連が深い。もっとも「空・中に入りては娑婆の妄執を蕩じ、仮諦に出でては西方の仏土を欣ぶ」と言われるように（一四頁）、厭穢は当然の事ながら裏に欣浄を伴う。実際、本章では空・中より仮諦の方が主に論じられている。その仮諦に二つ立てる。第一は生滅無常で、現世の無常なることを述べる。第二は仮諦即法界で、「我が身は即ち弥陀、弥陀は即ち我が身、娑婆は即ち極樂、極樂は即ち娑婆」と説く（一六頁）。それ故、「一念の妄心を翻して法性の理を思えば、己心に仏身を見、己心に浄土を見る」（同）と言われるのであり、そこから又、「乍く此土に住して先ず同居浄土の気分を得れば、順次往生は疑いあるべからず」とも言われるのである（一七頁）。最後に、極樂に執著する態度をも批判して極樂もまた空觀の対象であるとし、「閻浮を厭離するにあらずして而も之を厭離し、極樂を欣求するにあらずして而も之を欣求す」と結論づける（一八頁）。

さて、本章における最も特徴的な思想は言う迄もなく仮諦即法界ということであろう。本章では『法華經』や湛然が文証として引かれるが、勿論、元來の天台にはない思想で、日本天台において強く主張される現実肯定<sup>二</sup>事常住の

思想の先駆的な形態とすることができ。そこで、この点に關し、もう少し考えてみよう。

第一に、仮諦即法界が主張される根拠であるが、「仮諦の三千と理体とは本より隔たりなし。心を撰めて思惟すれば妄漸く蕩じ、父母所生の身に十界の依正を現す」と言われるように（一六頁）、一念三千の理論をもとに、己心がそのまま仏界の理法と融通する点に求められる。これは次章で凡聖が一心に備わることと説くのと同じ論法である。

第二に、だからと言って迷いのままの状態が認められる訳ではない。「淨穢は唯だ迷悟の差別なるのみ」（一六頁）と言われるように、迷悟の差別は歴然としている。あくまで迷を払い、「一念の妄心を翻」さなければならぬ。仮諦即法界と言っても決して安易な現実肯定ではない。

第三に、このように考えれば、娑婆即極樂とは言っても、その境地を体得することは決して容易ではないことになる。ここに来世に淨土がたてられなければならない必然性が生ずる。「根性の遲鈍なるが故に縦い今生の内に淨土を見ること能わざるも、遂に此の觀力に依りて順次に必ず上品の蓮台に生れむ」（一七頁）と言われるように、此土の觀がそのまま往生の業因となる構造は、第二章に關して指摘したところと同じである。

以上が仮諦即法界の基本構造であるが、その中で、藥王品の「於此命終、即往安樂世界、（乃至）生蓮華中」の解釈（一七頁）は注目される。素直に読めば此土における命が終ると直ちに來生に安樂世界に生ずるということであるが、本書では次のように解釈する。

「於此命終」——法華を修行すれば惡業の命は終る。

「即往安樂國」——安樂行（法華經の行）に住する。「即往」とは即生（現世）に惑業の心を転じて極樂の清淨衆の心となること。

「生蓮華中」——理解を生じて妙法蓮華の法門の中に入る。

このように非常に強引な解釈を下して現世往生に読みかえている。この読みかえは二重の意味で親鸞と関係深いように思われる。即ち、第一に、このようなものと文脈を無視した強引な読みかえはしばしば親鸞も行うところである。第二に、現世往生を基盤として来世往生に進むという構造は、親鸞における現世正定聚→来世成仏という思想と極めて近いものである。

最後に、本章の問題点をあげると、本章では「空に入りて娑婆の執を離れ、仮に出でて極楽の土を欣ぶ」という大きなテーゼを提出しているが、必ずしもこのテーゼが一貫している訳ではない。仮諦においても生滅無常の項では厭離穢土が述べられるし、逆に仮諦即法界の立場では、娑婆自体が厭離すべきでないとされる。逆に、本章末に述べられるように、空の立場では極楽もまた否定されるのである。

## 5 凡聖は一心に備わる

本章は極楽に往生できる根拠を述べた章である。それは「凡聖は一心に在りて機応は相隔たざるを憑む故」とされる（一八頁）。即ち、十界互具が根底に置かれ、一方で「我等が一念の心性は無始より已来、三身の万徳を備えたる」ものであり（一九頁）、他方で「聖人も凡性を備え」ている（二〇頁）。そこで両者が感応して往生が可能になると言うのである。このことを説いた後、性悪に関して二問答、一心に凡聖因果を具足することに関して一問答ある。

本章の論理は天台の十界互具・一念三千説にもとづく浄土教の基礎づけとして一応納得できるものである。しかし、このようにして感応するのは阿弥陀仏である必然性はない。他の仏に関しても全く同じ論理が使える筈である。一体、

本書は他章においても、何故阿弥陀仏の極楽浄土でなければならぬかという問題は全く論ぜられていない。いわば阿弥陀浄土説が前提とされ、その上で論がたてられている。『要集』で他方仏国、特に兜率天と対比している論じているのと対照的である。

## 6 生死に流転する源を知る

第六、七章は生死に流転する源を知り、生死より出離する観を教えるもので、第二章をさらに深く追求したものであり、第四章以下を中心をなす。

まず、第六章では生死に流転する源を無始無明ととらえる。「無始の無明の眠り、本覚の理を覆いて以来、法性の一覚心は変じて二種の生死の夢の一切心と成るなり」というのが本章の主旨である(二四頁)。以下は理論的な展開であるよりは、具体的に六道を輪廻する苦痛の叙述である。これらの叙述は当然『要集』大文第一と関係深い。最後に再び「凡そ此の如き多劫海の生死に流転する苦は元初の無明の闇識昏眠に由る」(三一頁)と繰返し、『止観』を文証として引いて終る。

本章は次の第七章と連続しているので、その問題点は第七章において考えたい。

## 7 生死を出離する観を教う

本章では流転生死からの離脱を説くが、それは「無明の根本を観じて生死の枝条を絶つ」(三一頁)ことによつて果たされるという。そこで、その具体的な方法が問題になるが、それは「我心自空、罪福無主」と観ずることだとい



う(三二二頁)。これは『止観』卷四上の文(もとは『観普賢経』)で、その前後の『止観』と『輔行』を引き、無明の眠心が所詮は空であることを言う。

次に、『金鉉論』の文を用いながら、一心三諦、一念三千を觀することを説く。その中でも特に第一義空がとりあげられ、「妄想の雲霧を払い心性の日輪を顕わ」したところが「即身成仏」と言われ(三五頁)、「弥陀名字の所詮、往生極樂の指南」であると言われる(同)。

以上がほぼ第七章の構造であるが、ここでは迷悟の構造がかなり理論的に論述されている。そこで、その点をもう少し考えてみよう。

まず、生死のもとには無始の無明が考えられる。これは第一章、第六章などでも説かれたところである。無始無明から迷いの存在が生ずる構造は以下のように述べられる。

中道の無性に迷いて梨耶の妄我を生ず。梨耶の一念より六識・七識を生ず。流れに逆いて源に帰れば亦た中道の無性に至る(三二〜三三頁)。

識論の立場から言えば、梨耶の一念(妄我)が第八識、中道無性が第九識にあたろう。これを図式化すると次のようになる。

前六識↓七識↓(八識) ↓(九識)

梨耶一念 中道無性

(梨耶妄我)

(↑迷、↓悟)

『観心略要集』の研究

この「中道無性」はまた、仏種、三千即空即仮即中の性、三因仏性と言われ（三三頁）、又、如来蔵の理とされる（三四頁）。他方、無始無明に関しては、「三千の諸法は無始の一念の無明に在り」と言われるように（三三頁）、一念三千の「一念」は無始無明の一念と考えられている。但し、第二章で「眠夢に百千の事を見るは仮諦の三千の理の如し。豁悟すれば一もなきは一念の如し」と言われている（七頁）ところでは覺心と考えられているようである。又、天台の元來の觀法からすれば、一念は凡夫の日常の陰入界心のはずであった。即ち、識論の立場からすれば、「一念」を第八識とするか、第九識とするか、前六識とするかの相違になる。本書では必ずしも嚴密に統一されていないが、「一念」に関しては第八識ととらえるのが中心のようである。これに対して、「一心三諦」の「一心」はこれまた嚴密ではないが、覺心の側を主として言っているように思われる。

次に、本書の問題点として、このような觀法が淨土念仏とどう関わるかということがある。具体的には第二章との關係如何という点である。上杉氏は第二章と第七章の相違として次の五点を挙げる<sup>(5)</sup>。

第二章

- (1) 所期は往生の華報
- (2) 対象は所照の阿弥陀
- (3) 対象は妙境
- (4) 対象を念仏に寄せて明す
- (5) 修行方便門として往生の業因を示す

第七章

- (1) 所期は成仏の果報
- (2) 対象は所破の無明
- (3) 対象は妄境
- (4) 対象を直に明す
- (5) 正しく出離の業因を明す

この比較はひとまずは認められるものの全面的には承服できない。このような見方では、第二章で述べられる念仏は

第七章に対して全く方便的なもので終ってしまふ。むしろ、本章は第二章の詳論と見られるべきである。実際、本章の第一義空を説いた箇所では、それを「弥陀の名字の所詮、往生極楽の指南」と言っている。又、確かに第二章で求めるのは往生の華報、本章の所期は成仏の果報と言つてよいが、前者を捨てて後者が求められるものではない。澆季の鈍根の者にとって、後者を実践しつつもまず往生を求め、極楽においてさらに修行しなければならぬのである。

## 8 空観を修して懺悔を行せしむ

前章で中心となる観法が説かれた。しかし、「妄情は至りて拙にして猶お有に迷う」(三六頁)が故に、さらに罪根を懺悔しなければならぬ。その懺悔とは、「理性の空を観ずる」懺悔であり(三六頁)、又、「無生を観ずる懺悔」である(三七頁)。それはまた「真の念仏三昧」とも言われ(三九頁)、「穢土の執を遣りて淨国の生を受くることは、偏えに空観の力に依る」とも言われるのである(三七頁)。

さて、ここで注目されるのは、何よりも懺悔が空観による理の懺悔として捉えられている点である。これは『要集』と著しい対照をなす。即ち、『要集』では、大文第五助念方法の第五で懺悔衆罪を説くが、その中に理の懺悔と事の懺悔を並べて説き、「此の中で何れを最勝と為すや」という問に答えて、「若し一人に約すれば機に順ずるを勝と為し、若し汎爾に判ずれば理懺を勝と為す」と答えている。<sup>(55)</sup>即ち、一般的な論としては理懺を勝としながらも、具体的な場においては事懺の方を勧めているのである。

## 9 真正の菩提心を発さしむ

ここでは「極楽に往生する業因」の「根本」(四〇頁)である菩提心を説くが、その具体的な様相は『摩訶止観』卷五上、十乘觀法のうちの第二真正發菩提心に拠っている。そして、空觀をもとにした四弘誓願、「円の菩提心」(四二頁)を起すべきことを言う。続いてその發菩提心を開会の立場から助釈する。即ち、「不思議境を識りて菩提心を發せば、一切諸法は悉く是れ仏法なり」と言われ(四二頁)、又、「煩惱即菩提」「生死即涅槃」と言われる(四三頁)。続いて、煩惱即菩提、生死即涅槃ならばどうして斷惑証理が必要かという点について、及び、何故に強いて心性の法身を顯わす必要があるのかという点についての問答があり、さらに善知識の必要を説く。その後、さらに開会の立場を種類種と相對種の二方面から考察した後、菩提心の功德をめぐる問答があり、最後に再び善知識の必要性を説く。本章は第十章を除けば本書中で最も長い章であるが、ひとまず、以上のような構造を考えることができよう。

さて、本章もまた『要集』と關係が深い。即ち、『要集』では大文第四正修念仏門の第三作願門で菩提心を説くが、懺悔の場合と同様、ここでも事の菩提心と理の菩提心を説く。そして、理の菩提心の方を高く評価しながらも、事の菩提心にも大きな機能を認めている。それに対し、本書はここでもまた懺悔の場合と同様、全く理の菩提心の立場をとっている。

そこで、本章の理の菩提心の立場であるが、既に引用したように、「不思議境を識りて菩提心を發せば、一切諸法は悉く是れ仏法なり」と言われており、現実肯定的である。例えば、「南樓の秋月を望みても真如の本宮に到るべく、金谷の春花を翫びても將に寂光の理土に還らむとす」(四二頁)と、耽美的な享樂がそのまま真理に到る道として肯定される。この立場は第四章の仮諦即法界と近いものと言えよう。しかし、第四章でも單純に即自的な現実肯定ではなかったのと同様、ここでも全き現実肯定という訳ではない。例えば、煩惱即菩提、生死即涅槃ならば斷惑証理が必

要ないではないか、という問に対し、「法性は寂然たるの故に生死と涅槃は理性として二なく、寂として常照なるの故に五住二死は嘗て混濫なし」と言われ（四三頁）、又、別の箇所では、「法界は常に平等なるが故に断惑証理なし」と雖も、法界は常に差別あるが故に皆発心修行あり」と言われる（四七～四八頁）。後の日本天台の全き現実肯定まで、なお一歩あると言うべきである。

## 10 問答料簡して疑いを釈す

以上でひとまず主要な議論が終り、最後に本章で問答の形で残された問題が論じられる。但し、そのことは本章で扱われる問題が重要性をもたない付随的なものだとということの意味しない。又、『要集』でも大文第十を問答料簡としており、本書と構造を等しくする。

さて、本章でとりあげられる問答は以下のようなものである。

(1)問——末代の行者に理観は困難である。ただ弥陀名号を唱えるだけではいけないか。

答——往生の為には理観を修すべきである。困難な面は多いが、我々は既に菩提心を起しているのだから、その益は大きい。

(2)問——観心の利益の文証はあるか。

答——『菩薩処胎経』等の文を引く。

(3)問——弥陀の加被なくして観心往生は可能か。

答——自らの機のみを憑むのは、弥陀の慈悲のみを憑むのと同様に不可である。

(4)問——理觀を修せず称名のみではどうか。

答——往生は可能である。

(5)問——散心の念仏が劣ならば、むしろ何もしない方がいいのではないか。

答——散心の念仏は理觀に較べると劣っているが、だからと言って手を束ねているのは誤っている。

(6)問——本書の述作意図は何か。

答——自利利他の為である。

以上が本章でとりあげられた六問答の概略である。ここでは本書の跋文的な役割を果している第六問答を除くと、他は一貫した問題で貫かれている。それは、觀心の念仏と散心の称名念仏の關係である。第九章まではもっぱら觀心念仏が論じられてきたが、本章にきてはじめて称名念仏がとりあげられる。しかも、それは確かに觀心念仏に劣るものとされながらも、決して付随的な扱いではなく、むしろ、かなり積極的に勧められているように見える。即ち、第一、第二問答では確かに理解の重要性が説かれるが、第三問答では自力のみの往生の不可能を言い、転じて第四問答ではかえって称名のみ往生を認めている。そして、第五問答ではひとまず事の念仏を理の念仏に較べて劣っているとしながらも「事理の念仏は俱に往生すれば、只だ頭燃を救うが如くすべし」(六〇頁)と云われて来るのである。

それではその称名往生の根拠はどこに求められるのか。その答は第四問答に示される。恐らくそれは次の二点に要約されよう。

第一は、「彼の繫念定生の願も未だ理觀を修せよと云わず、聖衆來迎の誓は只だ是れ至心の称名なり」と弥陀の本願が言われている(五七―五八頁)。ここに至って他力性が注目されてくるのである。そして、その伏線は第三問答

において「弥陀の加被に依らずして只だ自心を観ずるも往生すべきや」という問に、「只だ機を憑むも偏えに応を待つも共に不可なり」(五七頁)と唯自力往生を否定したところに既に張られているのである。ただ、このように弥陀の本願を根拠として出しながらも、それが繫念定生の願(二十願)、聖衆來迎の願(十九願)であり、第十八願をとりあげていない点は興味深い。

第二に、先に引いた弥陀の本願を挙げた文に続き、「夫れ名号の功德は莫大なるを以ての故に。所以に空・仮・中の三諦、法、報・応の三身、仏・法、僧の三宝、三徳、三般若、此の如き等の一切の法門は悉く阿弥陀の三字に摂まる。故に其の名号を唱うれば、即ち八万の法蔵を誦し、三世の仏身を持つたもつなり」と言われている(五八頁)。即ち、名号の功德の莫大性が言われるのであるが、その理由として、空・仮・中の三諦等がその中に摂められているからだと言われている点は興味深い。これは言う迄もなく、第二章に出て来た本書の中核思想とも言うべき阿弥陀三諦説に他ならない。しかし、第二章において、それは念仏から観念へと深まっていく媒介の役割をしていたのに対し、ここでは逆に称名念仏の根拠づけの役を果している。前者を事から理への方向と見ると、後者は逆に理から事へ出る方向とすることが出来る。阿弥陀三諦説は後に叡山浄土教においてさらに発展するが、特に後者の方向は思想的に重要である。浄土宗を開いた源空は『選択本願念仏集』第三章において、念仏本願の理由として勝劣・難易の二義をあげているが、勝劣義とは名号の中に万徳が含まれているということであり、そこには叡山において発展した阿弥陀三諦説の影響が見られるのである。<sup>(57)</sup>このように見るならば、一見観心念仏を説いた本書が、逆に後の称名念仏の隆盛に大きな働きを為していくということもできるのである。

こうした面も含めて、本書の思想史的位置づけに関してはなお検討しなければならない問題が多い。しかし、今は

その点を十分に論ずる準備ができていない為、又の機会に譲ることにしたい。<sup>(58)</sup>

- 1 仏全(新)九六、一四七a。
- 2 筆者の調べた範囲では、大谷大学所蔵の大正八年写本(禿氏祐祥氏所蔵本の転写)がこうなっている。
- 3 『釈教諸師製作目録』『本朝台祖撰述密部書目』『諸宗章疏録』『山家祖徳撰述篇目集』『日本国天台章疏目録』『蓮宗類聚聚経録』『浄土真宗教典志』等。
- 4 『二帖抄』卷上(天台宗全書本一三二頁)、『略要集』三三頁。
- 5 『二帖抄』卷下(天台宗全書本一四三頁)、『略要集』一九頁。
- 6 天台宗全書本は寛文七年(一六六七)の写本に拠っている。
- 7 『昭和重修法然上人全集』(法全)四〇頁。
- 8 『浄土宗全書』九、六九七頁。
- 9 源空は中古天台の文献としては、『真如観』に言及している(『百四十五箇条問答』、法全六四八頁)他、『三部経大意』によれば、叡山の阿弥陀三諦説についても熟知していたことが知られる(法全三九頁)。
- 10 上杉文秀『観心略要集講録』第一篇(大正二二年、大谷大学内安居事務所)二六八―二六九頁。
- 11 『定本親鸞聖人全集』二、六三頁。全集の注では、『金光明最勝王経』(正蔵一六一四五六)によるとする。
- 12 拙稿『妙行心要集』の諸問題(『多田厚隆先生記念論集』掲載予定)。
- 13 この点については、既に、上杉、前掲書二頁、佐藤哲英『観心略要集』(昭和三七年)解説一―二頁に概観されている。
- 14 上杉、前掲書、二頁。



- 15 後述の通り(第三節)、これらの諸本においては「曰」と「云」を使い分けている。
- 16 『浄土宗全集』一五、七六五頁。
- 17 田村芳朗『鎌倉新仏教思想の研究』(平楽寺書店、一九六五)四八一～三頁。
- 18 奈良弘元「源信の著作について」(精神科学一六、一九七七)。その概要は『宗教研究』二二六に発表されている。
- 19 花野充昭「中古天台と念仏思想」(佐藤哲英『叡山浄土教の研究』百華苑、一九七九所収)三二七～三三四頁。
- 20 正蔵八四、五五c～五六a。
- 21 正蔵五七、六七六c。
- 22 恵全一、五一七頁。
- 23 正蔵八四、四八c。
- 24 もっとも早くは円珍の『講演法華儀』に引かれる(日蔵新八〇、四六b)。安然のものでは『教時義』巻一(正蔵七五、三八四c)、巻二(同、三九七a)、『菩提心義抄』巻一(同、四六九c)、巻四(同、五二四c)等に見える。田村芳朗他『天台本覚論』(岩波書店、日本思想大系九、一九七三)四五二頁の「本覚讚」の注参照。
- 25 但し、花野氏が源信が真撰とする『正修観記』は疑問であり、又、思想内容の検討はさらに細心に行う必要がある。
- 26 正蔵八四、三三a。
- 27 平了照「恵心僧都の観心略要集について」(『福井博士頌寿記念東洋文化論集』早稲田大学出版会、一九六九)六〇二～三頁。
- 28 佐藤哲英『叡山浄土教の研究』(百華苑、一九七九)第四章第二節、他。  
石田瑞磨『浄土教の展開』(春秋社、一九六七)第三章、他。  
坂東性純「源信の教・観の性格について」(仏教セミナー八、一九六八)。

29 注19、27、28の論著参照。因みに、「強圉」に「丁」以上の意味を読みとろうとする説もあるが、漢籍の基本的な扱い方から言って不適当である。

30 拙稿「『観心略要集』の撰者について」(印仏研二七—一、一九七八)。

31 『塚本善隆著作集』第六卷(大東出版社、一九七四)二四—頁。

32 塚本善隆「日本に遺存せる遠文学とその影響」(著作集第六卷所収)。

33 一つ付け加えるならば、偽撰戒珠伝を引用した文献として、塚本氏が挙げた以外に以下のものがある。

○『覚禅鈔』阿弥陀法下に「往生伝云戒珠」として頓臬の伝を引く(仏全五三、八一c)。「宝物集」九卷本にも七度選俗の僧のことを述べるが(仏全九一、二八c)、雄俊のことと考えられる。

特に『覚禅鈔』は十二世紀後半のものであり、塚本氏が本書を引用するものはすべて十三世紀以後だとする説は訂正を要する。

34 花野、前掲論文、三四六頁。

35 山内洋一郎「法華百座聞書抄の説話」(小林芳規編『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院、一九七五所収)六六—七頁。同「阿弥陀魚説話考」(中世文芸四六、一九七〇)。

36 佐藤哲英「叡山浄土教古文獻の調査と研究」(竜谷大学仏教学会編『仏教文獻の研究』百華苑、一九六八)一九頁。その他の論文にも出る。

37 注12にあげた拙稿。

38 上杉『講録』二〇頁、佐藤『観心略要集』一六頁。

39 以下、本節における引用箇所を表示は、漢数字で頁、算用数字で行を示す。四七—3は四七頁3行目。

40 経の引用で「云」になっているもの、三〇—7、五一—2、六一—4。その他で「曰」になっているもの、一五—11、

- 三八―6、三九―11。
- 41 正藏三〇、三九七b。
- 42 正藏八四、三七b。
- 43 正藏四七、一〇二b。
- 44 正藏八四、五八c。
- 45 『定本親鸞聖人全集』二、一八四頁。
- 46 花山信勝『原本校註漢和对訳往生要集』（小山書店、一九三五）。
- 47 同、註記三四頁。
- 48 佐藤『叡山浄土教の研究』第二部二五九―二七四頁に西村岡紹氏が解説・書下しを付して紹介している。
- 49 寛文板一丁表。
- 50 上杉文秀『観心略要集講録』一一頁。
- 51 上杉、前掲書一五―一六頁。
- 52 佐藤哲英『観心略要集』解説一三頁。
- 53 上杉、前掲書一〇七頁。
- 54 上杉、前掲書五五―五七頁。
- 55 正藏八四、六五c。
- 56 『昭和新修法然上人全集』三一、九頁。
- 57 この点を含め、阿弥陀三諦説の諸問題に関しては、拙稿「阿弥陀三諦説をめぐって」（印仏研二八一―、一九七九）に略説した。

58 この点に関する一試論として、第二九回国際東方学者会議(一九八四年五月)に“Pure Land Buddhism in the Heian Period”と題して英文で口頭発表を行なった。その要旨は、*Transactions of the International Conference of Orientalists in Japan*, No. XXVIII-XXIX, 1984, pp. 136-137 に掲載された。

(付記)

貴重な資料の閲覧や複写に関し、各大学図書館並びに坂東性純前大谷大学教授、及び花野充昭氏のお世話になった。

なお、この度、雑誌『天台』に伊藤堯海氏による「観心略要集の研究」の連載が開始された(第八号、一九八四)。訳注を含む大部のものになる様子であるが、本稿脱稿後に連載が開始された為、参考にすることができなかった。

『観心略要集』引用書索引

1. 引用を明示しているものだけでなく、他の文に引用・言及しているものや参考とすべきものも含める。従って、具体的には本稿のⅠ注解篇の書名索引となる。但し、『類聚名義抄』など、直接内容と関係しないものは略した。
2. 配列は大正蔵の配列に従い、その後に蔵外の内典外典を加える。冒頭の数字は大正蔵の經典番号である。
3. 該当箇所は恵全本の頁・行で示す。56は5頁6行目。行は引用の冒頭2行である628, 8とあるのは62頁8行目に2回引用がある場合である。
4. 引用が明記されているものはゴチックで記し、参考として掲げたものは( )を付してある。

〈經典〉

- 157 悲華經 56, 48<sub>3</sub>  
159 大乘本生心地觀經 1<sub>3</sub>, 30<sub>6</sub>, 7, 37<sub>9</sub>, 38<sub>4</sub>, 12, 39<sub>8</sub>, 51<sub>2</sub>, 4  
185 仏説太子瑞応本起經 40(8)  
201 大莊嚴論經 62<sub>11</sub>  
202 賢愚經 61<sub>1</sub>  
210 法句經 25(6)  
211 法句譬喻經 25<sub>6</sub>, 63(11)  
220 大般若波羅蜜多經 11<sub>6</sub>  
223 摩訶般若波羅蜜經 3(11), 33<sub>9</sub>, 37<sub>3</sub>, 40(8)  
227 小品般若波羅蜜經 33(9)  
245 仏説仁王般若波羅蜜經 22<sub>4</sub>, 61(1)

- 261 大乘理趣六波羅蜜多經 24<sub>(10)</sub>, 29<sub>8</sub>
- 262 妙法蓮華經 1<sub>3</sub>, 2<sub>3</sub>, 3<sub>4</sub>, 4<sub>(9)</sub>, 9<sub>(11)</sub>, 10<sub>(5)</sub>, 12<sub>11</sub>, 16<sub>6</sub>, 17<sub>1</sub>, 5,  
20<sub>7</sub>, 11, 29<sub>6</sub>, 32<sub>(3)</sub>, 34<sub>2</sub>, 9, 35<sub>8</sub>, 8, 10, 46<sub>9</sub>, 50<sub>(7)</sub>, 57<sub>2</sub>, 60<sub>7</sub>,  
62<sub>8</sub>, 8, 64<sub>12</sub>, 65<sub>2</sub>
- 276 無量義經 55<sub>4</sub>
- 277 仏説觀普賢菩薩行法經 32<sub>1</sub>, 37<sub>12</sub>, 38<sub>10</sub>, 39<sub>10</sub>
- 278 大方広仏華嚴經 (60 卷本) 7<sub>6</sub>, 19<sub>9</sub>, 45<sub>3</sub>, 48<sub>6</sub>, 10, 49<sub>5</sub>, 10, 11, 50<sub>1</sub>,  
3, 54<sub>12</sub>, 63<sub>3</sub>
- 279 大方広仏華嚴經 (80 卷本) 11<sub>4</sub>, 13<sub>8</sub>
- 293 大方広仏華嚴經 (40 卷本) 26<sub>12</sub>
- 310 大宝積經 25<sub>4</sub>, 27<sub>3</sub>, 48<sub>7</sub>
- 360 仏説無量寿經 1<sub>(7)</sub>, 9<sub>(3)</sub>, (10), 10<sub>(12)</sub>, 40<sub>(6)</sub>, 48<sub>4</sub>, 57<sub>12</sub>, 12, 63<sub>(15)</sub>
- 361 仏説無量清浄平等覚經 61<sub>(10)</sub>
- 365 仏説觀無量寿經 5<sub>7</sub>, 9<sub>(3)</sub>, 10<sub>(12)</sub>, 11<sub>4</sub>, 13<sub>4</sub>, 23<sub>8</sub>, 52<sub>2</sub>, 54<sub>10</sub>, 61<sub>(7)</sub>
- 366 仏説阿弥陀經 9<sub>(12)</sub>
- 367 称讃浄土仏摂受經 14<sub>5</sub>, 62<sub>10</sub>
- 375 大般涅槃經 5<sub>(1)</sub>, 11<sub>4</sub>, 15<sub>6</sub>, 10, 17<sub>(3)</sub>, 24<sub>11</sub>, 30<sub>7</sub>, 35<sub>7</sub>, 40<sub>(8)</sub>, 45  
3, 50<sub>8</sub>, 52<sub>(6)</sub>, 58<sub>(3)</sub>, 60<sub>(7)</sub>, 64<sub>6</sub>
- 383 摩訶摩耶經 15<sub>1</sub>
- 384 菩薩從兜率天降神母胎説広普經 56<sub>6</sub>
- 397 大方等大集經 15<sub>(5)</sub>, 56<sub>10</sub>, 61<sub>4</sub>
- 411 大乘大集地藏十輪經 55<sub>8</sub>
- 417 仏説般舟三昧經 }  
418 般舟三昧經 } 4<sub>(9)</sub>, 5<sub>8</sub>, 40<sub>2</sub>
- 475 維摩詰所説經 17<sub>(4)</sub>, 18<sub>2</sub>, 19<sub>11</sub>, 34<sub>2</sub>, 40<sub>4</sub>, 47<sub>3</sub>, 47<sub>(7)</sub>, 52<sub>4</sub>
- 642 仏説首楞嚴三昧經 45<sub>9</sub>, 58<sub>(3)</sub>

- 643 仏説観仏三昧経 13(3), 6, 29<sub>11</sub>, 30(1)  
653 仏藏経 39<sub>5</sub>  
666 大方等如来藏経 49(2)  
721 正法念处経 25<sub>1</sub>, 29<sub>6</sub>, 30<sub>6</sub>, 7, 31<sub>1</sub>  
724 仏説罪業応報教化地獄経 27<sub>8</sub>  
754 仏説未曾有経 38<sub>8</sub>  
842 大方広円覚修多羅了義経 87  
1043 請観世音菩薩消伏毒害陀羅尼呪経 55<sub>8</sub>  
1339 大方等陀羅尼経 60(6)  
1485 菩薩瓔珞本業経 6<sub>8</sub>

〈論 部〉

- 1059 大智度論 3(11), 5<sub>1</sub>, 16<sub>3</sub>, 23<sub>9</sub>, 25(9), 29<sub>8</sub>, 37<sub>3</sub>, 39<sub>11</sub>, 48(8), 50  
(6), 57(9), 64(7)  
1524 無量寿経優婆提舍 8<sub>12</sub>  
1564 中論 13<sub>12</sub>, 36<sub>11</sub>  
1579 瑜伽師地論 29(7), 29<sub>9</sub>  
1585 成唯識論 2(8), 8<sub>8</sub>  
1598 摂大乘論积 87  
1661 究竟一乘宝性論 20<sub>4</sub>  
1665 金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論 33<sub>4</sub>, 48<sub>9</sub>  
1667 大乘起信論 7<sub>1</sub>, 9, 20(3)  
1672 竜樹菩薩為禪陀迦王說法要偈 15<sub>8</sub>, 28<sub>11</sub>, 29<sub>4</sub>, 6, 31<sub>4</sub>

〈中国・日本選述書〉

- 1716 妙法蓮華経玄義 6<sub>9</sub>, 7(1), 19<sub>10</sub>, 29<sub>2</sub>, 37<sub>6</sub>, 38<sub>1</sub>, 40<sub>3</sub>, 50<sub>9</sub>, 52<sub>6</sub>,

558, 11, 581

- 1717 法華玄義釈籤(含十不二門) 71, 1, 2, 333, 482
- 1718 妙法蓮華經文句 27, 138, 331, 2, 466, 7, (9), 47(2), 488, 5211,  
649, 651
- 1719 法華文句記 171, 10, 225, 4210, 4611
- 1726 觀音玄義 1111, 214
- 1768 大般涅槃經疏 24(11)
- 1777 維摩經玄疏 51(11)
- 1778 維摩經略疏 545, 567, 577, 617
- 1785 金光明文句 372
- 1796 大毘盧遮那成佛經疏 351
- 1911 摩訶止觀 16, 29, 9, 11, 31, 1, 10, 44, 8, 9, 64, 8, 76, 8, 10, 87,  
104, 12(12), 155, 179, 192, 227, 232, 242, 5, 261, 274, 307,  
316, 8, 323, 33(9), 346, 10, 355, 366, 382, 6, 7, 39(11), 408,  
4211, 431, 9, 45(3), 12, 464, 477, 7, 492, 506, (8), 516, 527,  
531, 537, 546, 561, 12, 576, 9, 583, 604, 6, 7, 6311, 6410
- 1912 止觀輔行伝弘決 29, 49, 55, 61, (4), 1411, 156, 1611, 193, 205,  
229, 23(9), 269, 31(12), 325, 5, 7, 341, 356, 375, 463, 475,  
8, 10, 517, 533, 7, 10, 544, 11, 551, 568, 571, 8, 647, 10
- 1913 止觀義例 77, 217
- 1914 止觀大意 463, 47(7), 542
- 1924 大乘止觀法門 206, 4312
- 1932 金剛錚 2012, 235, 337, 518, 535
- 1941 法華三昧懺儀 201, 3712, 383
- 1958 安樂集 2(2), 406
- 1963 浄土論 619, 6110



- 1964 西方要決疑通規 57, 58<sub>5</sub>, 62<sub>7</sub>  
1967 念仏三昧宝王論 23<sub>(9)</sub>  
1980 往生礼讃偈 4<sub>(12)</sub>, 52<sub>10</sub>  
1983 浄土五会念仏略法事儀讃 5<sub>8</sub>  
2013 永嘉証道歌 15<sub>9</sub>  
2058 仏法蔵因縁伝 15<sub>11</sub>  
2066 大唐西域求法高僧伝 8<sub>7</sub>  
2122 法苑珠林 2<sub>(2)</sub>  
2682 往生要集 1<sub>6</sub>, 2<sub>1</sub>, 4<sub>8</sub>, <sub>(12)</sub>, 5<sub>(1)</sub>, 8<sub>(7)</sub>, <sub>(8)</sub>, <sub>(12)</sub>, 9<sub>3</sub>, 3, 9, 10, 11, 12,  
10<sub>(4)</sub>, 5, 7, 9, 12, 11<sub>2</sub>, 5, 7, 8, 12, 12<sub>1</sub>, <sub>(4)</sub>, 11<sub>10</sub>, 13<sub>1</sub>, 3, <sub>(4)</sub>, 15  
<sub>(1)</sub>, <sub>(8)</sub>, <sub>(11)</sub>, 18<sub>6</sub>, 24<sub>(10)</sub>, 25<sub>(1)</sub>, <sub>(4)</sub>, 27<sub>(4)</sub>, <sub>(8)</sub>, 28<sub>9</sub>, <sub>(11)</sub>, 29<sub>3</sub>,  
<sub>(4)</sub>, <sub>(6)</sub>, <sub>(6)</sub>, 7, <sub>(8)</sub>, <sub>(8)</sub>, <sub>(9)</sub>, 29<sub>(11)</sub>, 30<sub>1</sub>, <sub>(7)</sub>, 31<sub>(1)</sub>, <sub>(4)</sub>, 37<sub>1</sub>, 38  
<sub>(12)</sub>, 39<sub>(5)</sub>, <sub>(8)</sub>, 40<sub>(6)</sub>, 44<sub>12</sub>, 47<sub>(7)</sub>, 48<sub>(7)</sub>, <sub>(10)</sub>, 49<sub>(2)</sub>, <sub>(11)</sub>, 56<sub>(1)</sub>,  
58<sub>(5)</sub>, 61<sub>(4)</sub>, <sub>(10)</sub>, 62<sub>(11)</sub>, 65<sub>(4)</sub>

〈大正蔵未収内典・佚書・不明〉

- 蓮華三昧経 19<sub>6</sub>, 45<sub>1</sub>  
偽撰戒珠往生伝 58<sub>7</sub>  
即身成仏義私記(安然) 35<sub>5</sub>  
玉造小町子杜衰書 25<sub>(7)</sub>  
空也聖人願文 3<sub>(1)</sub>  
惟無三昧経 2<sub>2</sub>  
浄度菩薩経 2<sub>(2)</sub>  
玄枢 35<sub>3</sub>, 64<sub>6</sub>  
般若経 19<sub>8</sub>  
太子堅辞而説偈 60<sub>8</sub>

先德 635

〈外典〉

爾雅 1(7)

論語 281, 373, 513, 6311

荀子 50(12), 51(1)

莊子 17, 87, 9(6), 446

韓非子 258, 50(12)

山海經 534

史記 6112, 638, 652

漢書 9(6)

晉書 4(7)

文選 9(6), 7, 146, 27(6), 528, 624, 63(8)

孔子家語 3511

顏子家訓 5011

白氏文集 35, 1411, 154, 30(7), 637

蒙求 637, 7, 7, 8

三代實錄 1(3)

和漢朗詠集 154

或書 511

古人諺 5012